東方キリスト教世界研究　第六号　2022

Journal for Area Studies on Eastern Christianity Vol.6 2022

翻訳

ヨルダネス『ゲティカ』翻訳（1）

Jordanes, *Getica (History of the Goths)*: A Japanese translation with commentary (1)

加納　修　KANO, Osamu　名古屋大学大学院人文学研究科・教授
小坂俊介　KOSAKA, Shunsuke　愛知教育大学教育学部・講師
村田光司　MURATA, Koji　筑波大学図書館情報メディア系・助教

Abstract

This paper offers a Japanese translation of *Getica (History of the Goths)* written by Jordanes in Latin. The author composed it in Constantinople around 550. Here we publish the chapters 1 to 66. The work consists of three parts, apart from the preface (1-3) and conclusion (316): The first section (4-130) depicts the origin and history of the Goths before their separation into two groups, the second (131-245) the history of the Visigoths, and the last (246-315) that of the Ostrogoths. As the introduction to the translation, we discuss the identification of the author, the characteristics of his works, the importance of Getica as a historical source, and its reception in later centuries.

まえがき

ここに訳出するのは，6 世紀の歴史家ヨルダネスの作品『ゴート人の起源と行跡について（*De origine actibusque Getarum*）』（以下『ゲティカ』）である。訳出にあたっての解題として，あらかじめ著者ヨルダネスおよびその著作，『ゲティカ』研究の意義，そして写本伝来について述べておきたい。

1. ヨルダネスの生涯と著作

『ゲティカ』の著者ヨルダネスについて，われわれが確実に知りうることは少ない。その人物像，生涯にまつわる情報源は『ゲティカ』そして同じく彼の作品として伝来する『ローマーナ』[1] に記されるわずかな自伝的語りに限られるため，その記述内容の信憑性と解釈が常に問題となる。また同時代の同名人物との同定も不確実な推測に留まってしまう。このことを前提としながら，ここではヨルダネスの生涯とその著作について簡単に説明しておきたい [2]。

ヨルダネスの生没年は不明である。著作の執筆年代（後述）と自伝的記述から 6 世紀の人であったと推測される。自伝的記述（*Get.* 265［M266］）によれば，彼はかつてローマ帝国の軍司令長官（magister militum）グンティギス（*PLRE*, II: 526）の書記であった。このグンティギスのオジにあたる人物がアラン人の一派の指導者カンダク（*PLRE*, II: 256–257）であり，そしてカンダクの書記官を務めたのがヨルダネスの祖父パリア（*PLRE*, II : 832）であったという [3]。ヨルダネスの書記職就任はこの縁によるものだったと考えられる（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 2–4）。ともあれ，ヨルダネスは『ゲティカ』執筆以前に書記職を退いたらしい。彼はその契機を回心（conversio）と呼んでいるが（*Get.* 265［M266］），具体的にどのような変化が彼に生じたのかはわからない。ただ彼は少なくともキリスト教徒であり，叙述には明確な反アリウス主義の思想が示されている（*Get*. 132, 138）。そして『ゲティカ』『ローマーナ』執筆後のヨルダネスについてはなに

1　現在の通称である *Getica* および *Romana*（以下「まえがき」ではそれぞれ *Get.*，*Rom.* とする）というタイトルは写本には見られず，Gillett（2006: 150）および Dörler（2020: 122）によれば Mommsen の校訂版テクストに由来する。ヨルダネスはディオン・クリュソストモスの著作を『ゲティカ』と呼び（*Get*. 58），また同箇所でゲタエ人とゴート人の同一視をオロシウスに拠りつつ正当化する。訳註 188，252 参照。

2　ヨルダネスの生涯についてはさしあたり Wagner（1967: 3–57）; Christensen（2002: 84–102）; Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 2–19）参照，プロソポグラフィとして *PLRE*, III: 713–714 がある。邦語文献には谷口（1999: 63–65），佐々木（1997: 5–6）があるが，前者は専ら古い研究に依拠する点に注意を要する（松原 2010: 1305 も同様）。

3　ヨルダネスはこの箇所で父親の名も挙げているが，その読みは校訂者によって異なる。Mommsen（1882）では Alanoviiamuthis（cf. Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 4 n. 12）であり，Grillone（2017）は Viiamuthis と校訂している。

も断言できない。

ヨルダネスの出自に関しても触れておきたい。ヨルダネスは『ゲティカ』の結びにおいて出自ゆえのゴート人贔屓を疑う読者を想定しているかのように，その弁明となる文章を置いている（*Get*. 316）。この文章と先述の自伝的記述に基づき，先行研究にはヨルダネスの帰属する民族集団をアラン人かゴート人，さらにはヨルダネスが「小ゴート人（Gothi minores）」と呼んだ（*Get*. 267）ゴート人の一支族に帰す説がある（たとえば Wagner 1967: 5–17; Doležal 2014）。しかし Goffart（1988: 42–43）のようにそのような推測を斥ける立場，あるいは Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 4）のように，ヨルダネスの民族的出自の確定を重視しない立場もある[4]。

ヨルダネスの交友関係についても多くは推測に頼るしかない。『ゲティカ』の献呈相手として名が挙がるカスタリウス（*Get*. 1; *Rom*. 4），同様に『ローマーナ』を献げられたウィギリウス（*Rom*. 1; *PLRE*, III: 1376–1377）についても詳細は不明であり，ともにヨルダネスの友人かつ，カスタリウスはゴート人ないしゴート人に近しい人物であったと想像されるにすぎない。ウィギリウスを同名のローマ教皇（在位 537–555 年）と，そして『ゲティカ』著者を，教皇ウィギリウスの随行者として知られる北イタリアの一司教ヨルダネスに同定する説[5]は，現在では否定されている（Wagner 1967: 30–57; Goffart 1988: 42–47; Christensen 2002: 101–102）。その一方，ヨルダネスがかつてカッシオドルスの家宰を通じてその著作を読んだという記述（*Get*. 2）から，ヨルダネスはカッシオドルスの知遇を得ていたという想像も可能である。カッシオドルスは 540 年代にコンスタンティノープルに滞在しており（Christensen 2002: 56–57; Bjornlie 2013: 35–38, 80），ヨルダネスが彼の著作を読んだのはその時期のことだったかもしれない。しかしそれはあくまで彼の家宰を通じてのことであったとヨルダネスが断っている以上，少なくとも『ゲティカ』執筆以前に両者に直接の面識があったとは思われない。

ヨルダネスは 550 年頃，コンスタンティノープルにて『ローマーナ』と『ゲティカ』を執筆したと考えられている（Goffart 1988: 28–29; Christensen 2002: 103; Van Hoof & Van Nuffelen 2017）。執筆開始時期は不明だが，彼はまず『ローマーナ』に着手したものの，その途中カスタリウスの求めに応じて『ゲティカ』を執筆し，そして改めて『ローマーナ』に戻ったことが両作品の序文から推定される（*Rom*. 4; *Get*. 1）。完成時期にも細かい議論があるが，『ゲティカ』で取り上げ

4　ただしフランス語訳者 Devillers（1995: xvi）が指摘するように，ヨルダネスが想定読者に対して弁明していること自体の意味を探究することには意義があるように思われる。

5　この説は 19 世紀の Johannes Grimm にまで遡る。学説史については本文に挙げた文献に加え，Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 8 n. 33）参照，邦語では谷口（1999: 63）。

られる最新の出来事がマタスエンタ[6]とゲルマヌス[7]の結婚（549/550 年）そして二人の息子の誕生（550/551 年頃）であること（*Get*. 314）や，『ローマーナ』における執筆年代への言及（*Rom*. 4, 363）などから，551 年中には執筆を終えていたと考えられる（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 10–13）。

『ローマーナ』はキリスト教的歴史観に則り，世界の創造から彼の同時代までを扱った作品である。しかしその題名が示す通り，全体のおよそ四分の三はローマ帝国史にあてられる。ヨルダネス自身はこの作品を「年代記の要約（*De adbreviatione chronicorum*）」と表現しており（*Get*. 1. cf. *Rom*. 6），実際その記述は先行する様々な歴史叙述作品に依拠している。ただし叙述の枠組みは暦年ではなく集団の指導者や王，皇帝の治世を採用しており，その点ではローマ帝政期のいわゆる「略史」に似た性質を持つ（Banchich 2007: 310; Kulikowski 2018: 153）。

そしてここに訳出を始める『ゲティカ』は，ゴート人の起源から著者の同時代に至るまでの歴史を語る著作である。序文（*Get*. 1）によればこの著作はカッシオドルスによる全 12 巻の同名著作の要約として企図されており，その言葉を額面通りに受け取るならば，古代にしばしば作成された歴史書摘要の一種とみなしうるであろう（Horster & Reitz 2018: 444）。しかしながらヨルダネスの『ゲティカ』がどの程度までカッシオドルスの著作を忠実に要約しているかをめぐっては議論があり，近年では単なる摘要とみなすのではなくヨルダネス自身による文章と語りの構築を重視する立場が優勢となりつつある（Goffart 2005; Van Hoof 2019; Dörler 2020; Ford 2020）。

『ゲティカ』全体の構成についても示しておきたい。本書は校訂者により 316 節に分割されている。序文（1–3）と結語（316）を除く本文は, 内容からみて 3 つの部分に分けることができる。第一部（4–130）では世界地誌と分裂以前のゴート人の歴史, 第二部（131–245）では西ゴート人, 第三部（246–315）では東ゴート人の歴史が記述される。今回訳出するのは序文と第一部の前半, すなわち第 1 から 66 節までである。そのうち 4 から 24 節は地誌的な記述にあてられており，25 節からはゴート人の移動の歴史が描かれる。この節からはスカンザ（スカンジア, スカンディア）と呼ばれる島からのゴート人の移動，ゴート人とペルシア人やギリシア人との関係が主要なテーマとなる。そして 67 節以降でゴート人とローマ人の関係に焦点が移っていくことになる（次回以降訳出）。

6　東ゴート王テオドリック（在位 469/72–526 年）の孫娘で，同じく王ウィティギス（在位 536–540 年）の妻。540 年頃ウィティギスと共にコンスタンティノープルに連行され，542 年のウィティギス死去ののちゲルマヌスと結婚した（*PLRE*, III: 851–852）。

7　ビザンツ皇帝ユスティヌス 1 世（在位 518–527 年）の甥で，ユスティニアヌス 1 世の従兄弟。ユスティヌス治世より武官として重用され，ユスティニアヌスの最も影響力ある側近の一人であった。550 年に病により死去，マタスエンタとの間に同名の息子を遺した（*PLRE*, II: 505–507）。

2.『ゲティカ』研究の意義

一般に西洋中世史研究者のあいだでは，『ゲティカ』は現存する最古の「出自神話（origo gentis）」とみなされている。出自神話とは現代の学者が用いるカテゴリーであり，民族の起源，その慣習や移動，そして最終的な定着までを描く物語で，1200 年頃までの時期から伝わるゲルマン人，ケルト人，スラブ人，マジャール人について書かれた 20 点ほどの作品を総称する言葉である（Wolfram 2003）。最後の作品は，サクソ・グラマティクスによる『デーン人の事績』とされている。これらの作品はドイツ語圏の学界では「民族史（Volksgeschichte）」としてまとめられてきた経緯があり（Grundmann 1965: 12–17; 出崎 1986），トゥールのグレゴリウス『歴史十書』のような民族の起源を語らない歴史叙述も出自神話に含められることが多い。注意しなければならないのは，「民族史」にせよ「出自神話」にせよ，中世にそうしたジャンルが確立していたわけではないことである。実際に，origo gentis のタイトルを冠した作品は 7 世紀後半に書かれた『ランゴバルド人の起源』のみである。『ゲティカ』のように単独の書として執筆されたものもあれば，たとえばフランク人のそれのように，出自神話が年代記（『フレデガリウス年代記』）や歴史書（『フランク史書』），さらには詩（エルモルドゥス・ニゲルスがルートヴィヒ敬虔帝に捧げた詩）といった別のジャンルの作品に組み込まれている場合もある。こうした事情もあり，Goffart（1988）のように「民族史」や「出自神話」といったカテゴリー設定に否定的な研究者もいるし[8]，当然のことながら，いかなる観点から研究するかに応じて，出自神話に認められる意義も変わる。

かつての研究は，出自神話が口承で伝えられてきた物語を含み，そうした古来の伝承が民族アイデンティティの拠り所となったと考えてきた。出自神話研究を主導してきたオーストリアの歴史家 Wolfram は，民族の起源がスカンディナビアにあり，そこから出発した集団がゲルマンの神に由来するとする物語をとくに重視し，それらが旧約聖書やギリシア・ローマの博物誌や民族誌の記述だけでなく，また「民族誌以前の」，すなわち文字に記されていない古来の口頭伝承を含んでいて，民族アイデンティティの形成や維持に大きく貢献したと考えた[9]。そしてそうした物語を持つ集団が紀元 1，2 世紀のあいだにすでに，神に由来する祖先を想起させる集団名を獲得していたことに着目する。すなわち，出自神話においてアース神族に由来する王家を持つゴート人や，オーディンに名前を与えられたランゴバルド人である。他方で Wolfram は，ローマ人と同じくトロイアに起源を求める物語を有したフランク人や，そもそも出自神話を持たないアラマン人やバイエルン人のような集団の名前は，より新しく，別のタイプの民族形成のプロセスを反映するとする。すなわち，「勇敢な」もしくは「自由身分の」を意味するフランク人，「すべての人々」であるアラマン人，「ボヘミア出身の人々」であるバイエルン人については，出自神話以外の要素が民族アイデンティティにとって重要であったという。こうした区分をひとつの支

8　Goffart の研究については佐々木（1997）による紹介がある。

9　Wolfram の見解については佐藤（1998: 18–21）による紹介がある。

えとして，Wolfram は『ゲティカ』を研究してきた（Wolfram 1990a; 1990b; 1990c; 1994; 2004）。

だが，今日ではこうした姿勢に大きな疑問が投げかけられている。一方で，考古学の所見や大半が 13 世紀以降に書かれた北欧神話との安易な結びつけが批判されるとともに，他方で口頭伝承を大いに取り込んでいるとみなされてきた出自神話の作者が，実際には古代の文献に広く依拠していた事実がますます明らかにされつつある[10]。いまや『ゲティカ』に起源当初にまで遡りうるような口頭伝承が含まれているかどうかを明らかにするのは困難であるとみなされている[11]。

『ゲティカ』を含め 9 世紀前半までに書かれた出自神話は，Coumert（2007）によれば，最終的にかつてのローマ帝国の領土への定着を描いているという点でひとつにまとめることができる。ゴート人の他には，ランゴバルド人，フランク人，ブルグンド人，そしてアングル人とブリトン人について出自神話が伝わっている[12]。これに対して 9 世紀半ば以後に成立したノルマン人やザクセン人，スラブ人やデーン人などについての出自神話は，すでにキリスト教世界となり，確固たる民族アイデンティティを構築していた王国への統合を描いており，古代ローマ帝国は参照枠としての意義を失っていた。物語のプロットに着目したこの区分は，中世初期ヨーロッパの諸民族の形成にローマ帝国が及ぼした影響の大きさを際立たせている[13]。

フランスで Coumert の著作が発表されたのとほぼ同じ頃に，ドイツでは Plassmann（2006）が別の角度から出自神話を検討した。彼女の関心は，出自神話が民族アイデンティティの構築と当時の秩序の正当化にどのような役割を果たしたかにある。このため，物語の枠組み自体にさほど大きな意義は認められないだけでなく，厳密な意味では出自神話に属さない『歴史十書』のような作品も，中世の人々によって民族の歴史と認識され，アイデンティティ形成に重要な役割を果たしたかぎりにおいて，検討の対象に含められている。逆に『ゲティカ』は，セビリアのイシドルス（560 頃 −636 年）作『ゴート人，ヴァンダル人，スエビ人の歴史』とともに検討から除外される。こうした選別を正当化するにあたって Plassmann は，ヨルダネスの作品を解釈する際に生じる，先に触れたような方法上の困難を挙げたうえで，6 世紀半ばにはゴート人が政治的実体

10　『ゲティカ』に関しては，Coumert（2007: 62–101）に加えて，とりわけ Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 65–99）の功績が大きい。9 世紀半ばまでの出自神話全般については，Coumert（2007）参照。

11　Christensen（2002）によれば，ゴート人のあいだで継承されてきた伝承を確認できるのは，西ゴート王テオデリク 1 世（在位 418–451 年）がローマ軍と共にフン人に対峙した 451 年のカタラウヌムの戦い以後の時期に関する叙述だけである。Liebeschuetz（2011）は起源当初からの口頭伝承の存在を証明できると考えているが，Ghosh（2016: 46–60）は口頭伝承の存在を肯定しつつも，ヨルダネスに利用可能だったそれが果たして純粋に古代の情報を保存していたのか，あるいはカッシオドルスなどを経由して改変されていたのかといった問題には回答できないとする。

12　なお，セビリアのイシドルス『ゴート人，ヴァンダル人，スエビ人の歴史』は，ヴァンダル人とスエビ人についても短く記述している。

13　ゲルマン人や彼らによる王国形成にローマ帝国が及ぼした影響の大きさを強調する研究のなかで，出自神話を広く考察に取り入れている書物として，ギアリ（2008），クメール & デュメジル（2019）がある。

としてのアイデンティティをほぼ失っていたこと，したがって『ゲティカ』が彼女の挙げる 2 つの考察対象に役立たないことを強調する（Plassmann 2006: 30–32）。Plassmann の研究は出自神話という「ジャンル」の性格を規定することを目的としているわけではないので，『ゲティカ』をそこに含めることに異を唱えるものではない。むしろ，他の歴史叙述と合わせて，出自神話とされてきた作品を解釈する上での重要な論点，すなわち民族アイデンティティをめぐる問題と中世前期における社会秩序の正当化をめぐるそれを提示するものとして評価できる。古代末期と中世初期における歴史叙述とアイデンティティをめぐる関係は，近年の歴史研究で重視されるトピックのひとつとなっている（Pohl & Wieser 2019; Heydemann & Reimitz 2020; Kramer et al. 2021）。そこでは叙述内容が歴史的な事実を含むかどうかというよりは，書かれた歴史が過去に対するどのような認識を示しているか，他の競合する歴史認識とどのような関係にあったのか，作者がいかなる史料をどのように用いて歴史を作り上げたのか，歴史書がどのような背景のもとに成立し，どのように社会に働きかけたか，そしてその後どのように受容され，継承される過程でどのような改変，すなわち歴史認識の変化が生じたのかなどが問われている。これら数多くの問いかけに基づいて，民族アイデンティティの形成と変容の問題が再検討されている[14]。

こうした研究の進展に伴い，『ゲティカ』に対する研究者の眼差しも変化しつつある。すでに述べたように『ゲティカ』については，作者ヨルダネスがいかなる人物であったか，彼がカッシオドルスの歴史書に忠実であったのか，それがどれほどゴート人の口頭伝承を含み，実際のゴート人の生成について何を教えてくれるのかといった問題に議論が集中する傾向にあった（Christensen 2002 など）。いずれも重要であるが，断定的に答えるのが難しい問題である。これに対して，近年のとりわけ英語圏の研究は，作品成立の背景を注視する。『ゲティカ』は「出自神話」とされてきた中世初期の作品のなかで，西欧の外側で書かれた唯一の作品であり，ビザンツ帝国の首都で執筆された。そしてヨルダネスが『ローマーナ』と『ゲティカ』を執筆した 550 年前後は，ユスティニアヌス治世における対外軍事情勢および宗教政策面での危機的時期にあたる（Van Hoof & Van Nuffelen 2017）。対外軍事面では治世初期の成功とは異なり，540 年以降は不利な条件でのペルシアとの講和締結，イタリアでのゴート人の反攻（541–552 年），バルカン半島方面のゲピド人やスクラヴェニ人の侵攻といった情勢の悪化を見た。宗教政策面ではカルケドン公会議（451 年）後も燻り続ける論争を調停すべく，いわゆる「三章」の断罪宣告（544 年）や第二コンスタンティノープル公会議開催（553 年）の試みがあったものの，結局は失敗に終わった。

すでに Amory（1997: 291–307）らが先駆的に試みていたように，近年の研究はヨルダネスのふたつの著作をこのようなユスティニアヌス治世の転換期，そしてコンスタンティノープルの文芸環境のなかに位置付けて考察する必要性を強く示している（Merrills 2005:162–167; Bjornlie

14　フランク時代の歴史書を対象として中世初期における歴史叙述に関する研究を刷新した Reimitz（ライミッツ 2012; Reimitz 2015）が，エスニシティ研究を主導する Pohl と同じく Wolfram の弟子であることを喚起しておきたい。なお Reimitz は，Pohl の弟子でもある。

2013: 82–123; Van Hoof & Van Nuffelen 2017)。6 世紀のコンスタンティノープルは現在にまで伝わる文献を数多く産み出した場でもあった。カエサレアのプロコピオス『戦史』と『秘史』，マルケリヌス・コメス『年代記』，エウァグリオス『教会史』などの歴史叙述に加え，ヨハネス・リュドスの政治論やコリップスの称賛詩など，多くの著作が伝存する（Rapp 2005）。これらにはユスティニアヌス治世の対外軍事情勢の転変と宗教政策の影響とが，この皇帝に対する激しい毀誉褒貶として反映されている。そこには『ゲティカ』を，ビザンツ歴史叙述と文学のなかに位置付けていくための手がかりが確かにあると言える。

当面は，『ゲティカ』をその成立した時間と空間のなかに適切に位置づける試みが続けられると予想されるが，西欧中世の歴史叙述とビザンツのそれとの比較にまで関心が広がることも期待される。同じく，「アイデンティティ」をめぐる様々の問題が『ゲティカ』を対象としてさらに掘り下げて考察されるはずである。そして最後に，ヨルダネスがゴート人の伝承を取り入れたと推測されている 451 年以降の記述については，他の様々の同時代史料と照らし合わせながら読解することで，ローマ帝国末期と中世初期の歴史全般の解明に貢献することは疑いない[15]。

3.　テクストの伝来と受容

6 世紀中葉に著された『ゲティカ』は[16]，その後西方のラテン語圏において読者を獲得した（Croke 2003: 370）[17]。現在のところ確実と思われる最初期の証言は，8 世紀初めごろにラヴェンナで編纂された逸名著者の『世界地誌』や，8 世紀後半に著されたパウルス・ディアコヌスの『ランゴバルド史』に見ることができる（Mommsen 1882: xliv–xlv; Wiener 1920: 65–66; Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 103）[18]。

伝来する『ゲティカ』の最古の写本は，800 年前後に年代比定される。それ以降，12 世紀ごろまでにかけて 10 点を優に上回る数が作成されたほか，それらから筆写された後代の写本も多数残されている[19]。Mommsen（1882: xlvii–lxx）が提唱し後続の研究者が同意するところでは，確認されている『ゲティカ』のテクストはすべて，3 つのクラスのいずれかに分類できるとされる。クラス I は俗ラテン語の影響を強く受けている一方で，クラス III はより古典的な文法に沿っている。その一方で Mommsen は，クラス I とも III とも異なるものとしてクラス II の括りを設け，そこに O と B の 2 写本を入れている。これらは文体というよりは，省略箇所や綴りの共通性によっ

15　最新の研究として，佐藤（2021: 253–307）参照。

16　献呈先については，「1．ヨルダネスの生涯と著作」参照。

17　一方で，ギリシア語圏における『ゲティカ』の伝来は確認されていない。『ローマーナ』が流通した可能性については，Stover & Woudhuysen（2021）参照。

18　パウルス・ディアコヌス『ランゴバルド史』2.15, 17 では，『ゲティカ』の叙述は暗黙のうちに利用されている。

19　主要写本リストは「まえがき」末尾に掲げた。

てまとめられたものである。『ゲティカ』写本の系統樹を構築するにあたっては，これら 3 クラスをどのように位置づけるかが問題となってきた。

Mommsen は，当時彼が参照できた中で最古の H 写本（8 世紀末ないし 9 世紀初頭，フルダないしマインツ[20]）が属していたクラス I を優先した。彼はクラス I とクラス II に共通の親写本を想定したため, クラス I よりも大きく時代を下った写本しか存在しないクラス II には重きを置かず，また古典的な文体を特徴とするクラス III も，後代の写字生による修正の産物と判断した。その後 1929 年に, クラス III に属し H 写本と同時期ないしより早期に筆写された N 写本（8 世紀末, ボッビオ）が発見されたことを受けて，Giunta & Grillone（1991）はこのクラス III を優先した，より「古典的な」校訂テクストを発表した。そのテクストでは同時にクラス II 写本群の再評価も進められていたが，校訂者の一人 Grillone はその後のさらなる研究を踏まえて改めて『ゲティカ』の校訂を行い，クラス II により大きな比重を置くようになった。彼によれば，クラス II はクラス I とも III とも異なる独立した系統に位置づけられ，とりわけ B 写本（11 世紀）は他のクラスよりも原文に近い読みを幾つも伝えているというのである（Grillone 2017: xxxi, lxvii–lxxiii）。

このように既存の主要な校訂本 3 種は，校訂に際して優先するクラスがそれぞれ異なっているのだが，最新の Grillone（2017）が他の，とりわけ Mommsen（1882）より優れているかどうかについては，未だ研究者間で合意が得られていない。現時点で最新のまとまった解説と英語訳である Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 100–101）は, Galdi（2013）による『ローマーナ』と『ゲティカ』の統語論的な分析に基づいてクラス I（つまり俗ラテン語）のテクストこそがヨルダネスの筆に近いと判断し，英語訳の底本として Mommsen（1882）を選択する一方，Galdi（2013）を参照せずに十分な論拠なくクラス II や III を重視する Grillone（2017）の方針を批判する[21]。彼（女）らの考えでは，古典語の様相をより強く呈するクラス III は，カロリング期の教養層によるテクスト「修正」の産物とされるのである。

しかしながら，Van Nuffelen と Van Hoof の意見もまた，決定的と認めるにはなお解決すべき問題が残っている。ひとつは，未だ評価の定まらないクラス II の位置付けである。クラス II の性格に関する包括的な研究は，それがクラス I（と III）に劣らぬ重要性を持つ可能性を示しているが（Bradley 1995; Morand 2019），Van Nuffelen と Van Hoof はこの点について態度を保留したまま

20　H 写本の作成場所については, 写本にマインツ大司教座聖堂の蔵書であることを示す 15 世紀の註記があり，*CLA*: no. 1224 はこれに従って作成地もマインツとする。Mommsen（1882: xlvii）はフルダ修道院と想定している。

21　Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 101）は,『ローマーナ』のテクストが『ゲティカ』のクラス I 写本群のみに収録されていることも，クラス I の優位性を支える根拠の一つと述べる。しかしこの記述は不正確である。実際のところ，クラス II と推測される『ゲティカ』の抜粋を含む S 写本には,『ローマーナ』の抜粋も含まれている（Mommsen 1882: l–li; Rose 1893: 301–302; Morand 2019: 170–172）。クラス III に『ローマーナ』が含まれていた可能性については，Stover & Woudhuysen（2021: 171）参照。なお，筆者は現時点では Galdi（2013）を確認できておらず，その主要な論点は Galdi（2019）による要約でしか把握していないことを付記しておく。

である。もうひとつは，H 写本とともに最古の写本のひとつとされ，Mommsen が知らなかった，クラス III の N 写本の問題である。仮に Van Nuffelen らの見解を認めるならば，8 世紀後半（ないし 9 世紀）に比定される N 写本はカロリング期の教養人によって「修正」されたテクストそのもの，あるいはその最初期の写しということになる。しかしこの写本は，フランク王国の中心部ではなくイタリア北西部のボッビオ修道院で制作されたと想定されていることから，その性格について徹底的な調査が必要であろう [22]。

とはいえ，こうした課題に答えることは容易ではないことも事実である。実際のところ，かつて Mommsen が参照できた主要写本群のうち，クラス I 最古の H 写本や，2 つしかないクラス II 写本のひとつである B 写本など，合わせて 4 つの主要写本（H, B, X, Y）が 1880 年にモムゼンの自宅を襲った火災によって焼失しているのである [23]。したがって 20 世紀以降の研究が皆そうであるように，焼失した写本については Mommsen の刊本に付された apparatus criticus やさらに古い刊本に頼る以外にない。『ゲティカ』校訂問題の決着には，幾重にも困難が立ちはだかっている。

いずれにせよ，現在の史料状況に鑑みれば，『ゲティカ』は当初ラヴェンナを始めとするイタリア半島で，次いでアルプス以北の西ヨーロッパへと流布したようである。Tischler（2021: 72–74, 82–84）が論じるところでは，800 年前後のカロリング朝フランク宮廷においては，イタリアにおける新たな政治的アイデンティティ確立を目指して東ゴート王テオドリックに関する知識が求められ，その際『ゲティカ』が重要な情報源のひとつとなった。この説に従うならば，8 世紀末から 9 世紀にかけて多数制作された写本群は，この文脈に置かれることとなる [24]。10 世紀以降も『ゲティカ』は断続的に筆写され，ゴート人やフン人に関する史料として，また文学作品や神話形成のための素材として用いられた [25]。そしてとりわけ 15 世紀頃には，ゴート人の故地としての「スカンザ」に関する記述が，スカンディナヴィアとゴート人を結びつけるゴート・ルネ

22　現在はパレルモの公立文書館に所蔵される（*CLA*, no. 1741; https://elmss.nuigalway.ie/catalogue/2046（2022 年 5 月 12 日最終閲覧））。Cf. Stover & Woudhuysen 2021: 171（クラス III がより早期に成立した可能性を指摘する）.

23　モムゼン家で火災が発生したのは，まさにヨルダネス作品の校訂作業が行われている最中だった。その経緯については Mentzel-Reuters et al.（2005: 53–63）および Mandatori（2017）を参照。なお前者によれば Y 写本は一部残存しているほか，Bertelli（2008）はローザンヌに伝来する『ゲティカ』断片（Lausanne, BCU, MS 398）が H 写本の一部である可能性を指摘している（ただし Bischoff 1971: 110 n. 44 も参照）。しかし，Grillone（2017）はこの断片を見落としている。

24　カロリング期における『ゲティカ』受容の問題を論じるためには，『ゲティカ』が他のどのようなテクストと共に筆写されたかについて検討が必要であるが，管見の限り包括的な研究はまだ現れていないようである。8 － 9 世紀頃の写本群に限定するならば，『ゲティカ』は『ローマーナ』と共に（H, V, P, S 写本），ないしは単独で筆写されており（O, N 写本 ;『ローマーナ』単独の写本はこの時期からは確認されない），ヨルダネス以外のテクストを含むこともあるが（V, P, O, S 写本），その傾向性をここで論じる余裕はない。

25　前者の一例として，10 世紀後半に編纂されたコルヴァイのヴィドゥキント『ザクセン人の事績』1.18 を挙げておく。

サンスの動きを呼び起こすきっかけとなった。こうして近世以降，この作品は新たなコンテクストのもとで受容されていくこととなる[26]。そのことは『ゲティカ』の最初の印刷本が 1515 年，アウクスブルクの Peutinger の手で出版されたとき，『ローマーナ』ではなくパウルス・ディアコヌスの『ランゴバルド史』と合冊された事実にも明瞭に表れている（Peutinger 1515）。以来 19 世紀に至るまでに 10 を超える校訂本が刊行されてきているが，今後しばらくは上述した 1882 年の Mommsen 版か，2017 年の Grillone 版が用いられることとなろう。

今回の『ゲティカ』訳出にあたっても，上述の事情から底本として Mommsen 版か Grillone 版のいずれを採用するかが問題となった。近年の研究動向はクラス I と III の対立においては I の側に軍配を上げつつあるものの，Van Nuffelen & Van Hoof（2020）の英語訳のように Mommsen 版を底本として採用することは，Mommsen 以降の諸研究への配慮を怠る恐れから躊躇われた。また Mommsen の校訂方針は，ヨルダネスが古典ラテン語に通暁していないという前提のもと，ほぼ常に「俗語」的表現を優先するというものであり，必要以上にテクストを乱れさせているとの指摘もなされている（Morand 2019: 183–185）。他方で Grillone 版は，Mommsen とは逆に古典ラテン語への過剰修正が目立つほか，クラス II のとりわけ（今はなき）B 写本単独の読みを安易に採用する傾向にある。Grillone 自身によれば，その行為は主として叙述上のコンテクストに適合的であるとの理由でなされるのだが（Grillone 2017: lxvii–lxxiii），必ずしも説得的ではなく，またその観点はヨルダネス自身が書いたテクストに近いかどうかとは直接に関係がない。独立した系統としてクラス II を評価すべき積極的な理由は確かに存在するが，その読みの採用にあたっては，より慎重な議論が必要であると感じられる。すなわち現段階では，われわれは未だ十全に信頼を置ける校訂版を有していないのである。

こうした事情を踏まえて，われわれは今回の訳出に 2017 年の Grillone 版を底本とすることとした。この選択は，Grillone の校訂に全面的に賛成したからではなく，Grillone 版が Mommsen の利用していない N 写本を利用し，また apparatus において Mommsen 以降の研究者らの提案を掲載しており，異読を総覧するのに便利であると判断したからである[27]。われわれは訳出の際に Mommsen 版と Grillone 版で訳文に変化が生じる場合には，その都度どの読みを採用するか検討・選択し註記した。また現代語訳として，Devillers（1995）によるフランス語訳，Möller（2012）のドイツ語訳 , Grillone（2017）のイタリア語訳 , Van Nuffelen & Van Hoof（2020）の英語訳を特に参考にした[28]。

26　中世後期から近代に至る『ゲティカ』の受容については, さしあたり佐々木 (1998) および小澤 (2014) 参照。

27　ただし，今回の訳出部分に限っても，単純なミスと思しき誤字・異読の載せ忘れが Grillone 版には散見されることから，気づいた範囲で註記した。

28　ドイツ語訳（Möller 2012）と英語訳（Van Nuffelen & Van Hoof 2020）は Mommsen（1882）を，フランス語訳（Devillers 1995）は Giunta & Grillone（1991）をそれぞれ底本とする。既存の校訂本，翻訳，研究の包括的な一覧として Cristini（2021）を参照。なお訳註において各現代語訳の訳文を比較する際には, 単に「フランス語訳」

凡例および註記

訳文中のローマ数字とアラビア数字は校訂者によって施されたものであり，それぞれ「章」と「節」に対応する。Mommsen による区分が, 本稿が拠った Grillone 版のそれと異なるところでは，［M1, 2,…］として本文中に挿入した。括弧については次のように使い分けた。底本で使用されている括弧は 2 種類，引用を示す《 》および校訂者が付加的な説明と判断した（　）である。後者はそのまま用い，前者は「 」とした。訳出にあたっては，可能なかぎり原文に忠実であるよう心がけたが, 文意を伝えるために言葉を補う必要があると判断した場合には, ［　］を付した。また読者の理解を助けるための説明ないし言い換えを〔　〕を用いて付した。

人名や地名など固有名詞の表記については，以下の方針を採った。ラテン語の長母音と短母音の区別は行わなかったが，Roma は慣例に倣って「ローマ」と表記した。促音については，慣例によるものを除いて省略した。ギリシア語に由来する固有名詞（ストラボンなど）については，慣例にしたがった。頭を悩ませたのは，ゲルマン系とされてきた様々の集団名や個人名の表記である。古ゲルマン語の音声表記は，それを知るのを可能にする同時代史料が残っていないため，現代ドイツ語からの類推に基づいている（Bergmann et al. 1999: 143–146）。たとえば，v は濁る場合もあれば，そうでないときもあるし（Vater – Vase），b, d, g は語尾に用いられた場合には濁らない（Baum – Laub, Dach – Hand, Golf – Weg）。また，ch も位置により（Chrom – Dach – Wachs），e も単語により発音が変わる（Bette – Herd – Leib – lieb）。こうした不確実性に鑑みて，本稿ではゲルマン系の固有名詞については，慣例となっているものを除いて，ラテン語原文の表記にしたがった。その際, 古代史の分野と中世史の分野とで慣例が異なる場合には, たとえば「アラマン人」のように，中世史において慣例となっている表記を優先した。ただし，それでもラテン語の発音の問題は残る。ヨルダネスのラテン語は，ラテン語の時代区分を用いれば後期ラテン語（3–6 世紀）に属するが，カロリング期以前の中世初期ラテン語の発音は，地域によって異なっていたと考えられている（Wright 1982: 45–103）。さらに，そもそもヨルダネスがコンスタンティノープルで執筆したことを忘れてはならない。そして，写本のところで述べたように，ヨルダネスの書いたラテン語が口語に影響を受けた俗ラテン語であったのか，それとも古典ラテン語に近かったのかに関する議論もなお終結していない。こうした状況を踏まえて，ここでは発音体系が明瞭にされている古典ラテン語の表記を優先することにした。したがって, v は「ヴ」とするのではなく，原則として「ウ」とした（「ヴァンダル人」,「スクラヴェニ人」のように慣例となっているものは除く）。すでにローマ帝国帝政初期に v は b と表記される場合もあったが（國原 2007: 34–42），カタカナ表記する際にはこの点は考慮しなかった（ただし「スエビ人」には Suebi と Suevi の二通りの表記があり，本稿では「スエビ人」とした）。このほか,「ライン川」,「ドナウ川」,「ゲピド人」など，慣例となっている表記にしたがったところもある。地名の同定にあたっては基本的

「ドイツ語訳」「英語訳」「イタリア語訳」と表記した。

に現代語訳の註記に依拠し，また各種事典類（主なものは参考文献に掲げた）を参照したが，議論や疑念がある場合には，その旨を記した。

いくつかのラテン語の単語については，あえて統一的に訳し分けなかったことを述べておきたい。具体的には，gens, genus, natio, populus である。古代においても中世初期においても gens と natio はしばしば同じ意味，すなわち特定の社会的・文化的特徴の共有によって他とは区別される集団の意味で用いられると同時に，タキトゥスについて言われるように，より小規模の集団を natio，より大規模の集団を gens で表現する場合もあった（Zientara 1986; Geschnitzer 1992; Werner 1992; Mathisen 2015）。ヨルダネスの作品においては，先の 4 つの単語に加えて prosapies も含め，すべてほぼ同じ意味で用いられたとされているが，ヨルダネスによるこれらの単語の用い方について詳細な考察はなお行われていない（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 102）。このため英語訳は基本的に people もしくは nation の語をあて，「人種」や「部族」といった誤解を与えかねない概念を避けている。本稿もこの立場に賛同し，genus を「人種」と訳すのを避け，gens と natio については原則として「民」もしくは「民族」の訳語を用いたが，文脈に応じて「人々」あるいは「集団」の語を当てたところもある。その際にルビを振ったのは，単数形か複数形かを明記するためでもあるが，またヨルダネスがこれらの単語を使い分けていなかったとは断言できないからである。なお，「gens（複数形 gentes）～」として集団名を示す箇所では，統一して「～族（の諸族）」と訳した。結局のところ，われわれは『ゲティカ』1–66 節における用例に基づいて，ある程度の訳し分けをしたことになるが，われわれの訳が適切であるかどうかは，『ゲティカ』と『ローマーナ』全体を熟読した上で再検討される必要がある。

ヨルダネスが『ゲティカ』執筆の際に用いた史料，ならびに『ゲティカ』に関連する史料については，主に Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 65–99）を参考にして一覧を作成し，邦訳があるものはそれを，ない場合は他の現代語訳もしくは校訂本を挙げた。訳註で言及する際には作者名と作品名を日本語で表記し，史料の該当箇所についてはアラビア数字で示した。その際，本稿がとくに依拠した英語訳の註をいちいち明記しなかったこと，また英語訳で挙げられている該当箇所が邦訳の区分と異なっている場合には後者を優先し，英語訳の指示が間違っている場合には可能なかぎり訂正したことを断っておきたい。翻訳の作業は 2020 年 4 月から月に 2 回程度の頻度で 3 人が集まって共同で行ってきたが，投稿にあたっては，1–24 節を加納，25–46 節を小坂，47–66 節を村田が訳出して註を付した原稿を，あらためて 3 人で検討して完成させた。「まえがき」については，作者ヨルダネスとその作品については小坂，『ゲティカ』を含む「出自神話」に関する研究状況については加納，写本伝来の部分は村田が執筆を担当したが，翻訳原稿についてと同様に 3 人で議論したうえで仕上げた。訳文ならびに「まえがき」の文章については，加納が必要な統一を施した。「まえがき」および訳註で取り上げた史料については小坂が，写本・刊本については村田がとりまとめた。

ヨルダネス『ゲティカ』主要写本一覧

（冒頭に * が付されたものは，現在では消失ないし一部のみ残存）

＜クラス I ＞

V (Valenciennes, Bibliothèque municipale, 95: 9 世紀，サンタマン修道院)

P (Vatican, Biblioteca Apostolica Vaticana, lat. 920: 9 世紀，ロルシュ修道院)

*H (Heidelberg, Universitätsbibliothek Heidelberg, Palat. lat. 921: 8 世紀末か 9 世紀初頭，フルダかマインツ。Cf. *CLA*, no. 1224)

L (Firenze, Biblioteca Medicea Laurenziana, lat. Plut. 65.35: 11 世紀)

A (Milano, Biblioteca Ambrosiana, lat. C 72 inf.: 11 世紀か 12 世紀)

＜クラス II ＞

*B (Wrocław, former City Library, Rehdigerenus 84: 11 世紀 . Cf. Guttmann ca. 1840: 16; Ziegler 1915: 52–55)

O (Vatican, Biblioteca Apostolica Vaticana, Ottobonianus lat. 1346: 10 世紀)

S (Berlin, Staatsbibliothek, Phillips 1885 & 1896: 9 世紀，一部の抜粋)

＜クラス III ＞

*X (Cambridge, Trinity College Library, O.4.36: 11 世紀)

*Y (Berlin, Staatsbibliothek, lat. 359: 12 世紀)

*Z (Arras, Abbaye Saint-Vaast: 11 世紀？ Cf. Mommsen 1882: lxvii; Grillone 2017: xxix)

N (Palermo, Archivio di Stato, cod. Basile: 8 世紀後半，ボッビオ。Cf. *CLA*, no. 1741)

Q (Saint-Omer, Bibliothèque d'agglomération, 717: 11 世紀)

T (Paris, Bibliothèque nationale de France, lat. 5873: 11 世紀)

ヨルダネス『ゲティカ』，『ローマーナ』近代の主要刊本および現代語訳（年代順）

Peutinger, C. (ed.) (1515) *Iornandes De rebus Gothorum et Paulus Diaconus Foroiuliensis De gestis Langobardorum*, Augsburg: I. Miller.

Mommsen, Th. (ed.) (1882) *Iordanis Romana et Getica*, Berlin: Weidmann.

Giunta, F. & A. Grillone (eds.) (1991) *Iordanis De origine actibusque Getarum*, Roma: Istituto storico italiano per il medio evo.

Devillers, O. (tr.) (1995) *Jordanès, Histoire des Goths*, Paris: Les Belles Lettres.

Möller, L. (tr.) (2012) *Jordanes, Die Gotengeschichte. Übersetzt, eingeleitet und erläutert*, Wiesbaden: Marix Verlag.

Grillone, A. (ed. & tr.) (2017) *Iordanes, Getica. Edizione, traduzione e commento*, Paris: Les Belles Lettres.

Morand, A.-L. (ed.) (2019) *Édition critique, traduction et commentaire des Romana de Jordanès* (Thèse de Doctorat), Lorraine: Université de Lorraine.

Van Nuffelen, P. & L. van Hoof (tr.) (2020) *Jordanes, Romana and Getica*, Liverpool: Liverpool University Press.

その他の史料（訳註作成にあたって参照した現代語訳もしくは校訂版）

アテナイオス『食卓の賢人たち』:柳沼重剛訳（1997–2004）『アテナイオス　食卓の賢人たち』（全5巻）京都大学学術出版会

アンミアヌス・マルケリヌス『歴史』：J. C. Rolfe (tr.) (1935–1939) *Ammianus Marcellinus*, 3 vols., Cambridge, MA-London: Harvard University Press.

アポロドロス『ギリシア神話』：高津春繁訳（1953）『アポロドーロス　ギリシア神話』岩波書店

イシドルス『ゴート人，ヴァンダル人，スエビ人の歴史』: Th. Mommsen (ed.) (1894) *Chronica Minora saec. IV. V. VI. VII*, vol. II, Berlin: Weidmann: 241–303.

ウェルギリウス『アエネーイス』『牧歌』『農耕詩』：岡道男・高橋宏幸訳（2001）『ウェルギリウス　アエネーイス』京都大学学術出版会；小川正廣訳（2004）『ウェルギリウス　牧歌／農耕詩』京都大学学術出版会

オリゲネス『ローマの信徒への手紙注解』：小高毅訳（1990）『ローマの信徒への手紙注解』創文社

オロシウス『異教徒を反駁する歴史』：A. T. Fear (tr.) (2010) *Orosius, Seven Books of History against the Pagans*, Liverpool: Liverpool University Press.

カッシウス・ディオ『ローマ史』：E. Cary & H. B. Foster (tr.) (1914–1927) *Dio Cassius, Roman History*, 9 vols., Cambridge, MA: Harvard University Press.

カッシオドルス『雑纂』：M. S. Bjornlie (tr.) (2019) *The Variae: The Complete Translation*, Oakland: University of California Press.

キケロ『神々の本性について』：山下太郎・五之治昌比呂訳（2000）『キケロー選集 11　哲学 IV』岩波書店

クインティリアヌス『弁論家の教育』：森谷宇一・戸高和弘・渡辺浩司・伊達立晶訳（2005）『クインティリアヌス　弁論家の教育 1 』京都大学学術出版会

クラウディウス・クラウディアヌス『エウトロピウス駁論』：J.-L. Charlet (ed.) (2017) *Claudien, Œuvres, tome III, poèmes politiques (399–404)*, Paris: Les Belles Lettres; M. Platnauer (tr.) (1922) *Claudian*, vol. 1, Cambridge, MA: Harvard University Press.

コルヴァイのヴィドゥキント『ザクセン人の事績』:三佐川亮宏訳（2017）『コルヴァイのヴィドゥキント　ザクセン人の事績』知泉書館

ステファノス『エトニカ』：M. Billerbeck et al. (eds.) (2006–2017) *Stephani Byzantii Ethnica*, 5 vols., Berlin: De Gruyter.

ストラボン『地理誌』：飯尾都人訳（1994）『ギリシア・ローマ世界地誌』（全 2 巻）龍溪書舎

ソリヌス『驚異譚集成』：Th. Mommsen (ed.) (1895) *C. Julii Solini collectanea rerum memorabilium*,

Berlin: Weidemann; A. Apps (2011) *Gaius Iulius Solinus and his Polyhistor* (PhD diss.), Sydney: Macquarie University. https://topostext.org/work/747 (2022 年 5 月 12 日最終閲覧）

タキトゥス『ゲルマニア』『アグリコラ』：國原吉之助訳（1996）『タキトゥス　ゲルマニア　アグリコラ』筑摩書房

トゥキュディデス『歴史』：藤縄謙三・城江良和訳（2000–2003）『トゥキュディデス　歴史』（全 2 巻）京都大学学術出版会

パウルス・ディアコヌス『ランゴバルド史』：L. Bethmann & G. Waitz (eds.) (1878) *Pauli Historia Langobardorum*, Hannover: Impensis Bibliopolii Hahniani; 日向太郎訳（2016）『パウルス・ディアコヌス　ランゴバルドの歴史』知泉書館

プトレマイオス『地理学』：織田武雄監修・中務哲郎訳（1986）『プトレマイオス地理学』東海大学出版会

プリスコス『歴史』：R. C. Blockley (1983) *The Fragmentary Classicising Historians of the Later Roman Empire: Eunapius, Olympiodorus, Priscus and Malchus*, vol. II: *Text, Translation and Historiographical Notes*, Liverpool: Francis Cairns: 222–400.

プリニウス『博物誌』：H. Rackham et al. (tr.) (1938–1962) *Pliny the Elder, Natural History*, 10 vols., Cambridge, MA: Harvard University Press.

プルタルコス『英雄伝』「セルトリウス伝」：城江良和訳（2015）『プルタルコス　英雄伝 4 』京都大学学術出版会

プロコピオス『戦史』: H. B. Dewing & A. Kaldellis (tr.) (2014) *Prokopios: The Wars of Justinian*, Indianapolis-Cambridge: Hackett Publishing Company, Inc.

ヘロドトス『歴史』：松平千秋訳（1971–1972）『ヘロドトス　歴史』（全 3 巻）岩波書店

ヒエロニュムス『書簡集』：F. A. Wright (tr.) (1933) *Jerome, Select Letters*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

ホメロス『イリアス』『オデュッセイア』：松平千秋訳（1992）『ホメロス　イリアス』（全 2 巻）岩波書店；松平千秋訳（1994）『ホメロス　オデュッセイア』（全 2 巻）岩波書店

ポンポニウス・メラ『地誌』：飯尾都人訳編（1999）『ディオドロス「神代地誌」; ポンポニウス・メラ「世界地理」; プルタルコス「イシスとオシリス」』龍溪書舎 ; A. Silberman (ed. & tr.) (1988) *Pomponius Mela, Chorographie*, Paris: Les Belles Lettres; F. E. Romer (1998) *Pomponius Mela's Description of the World*, Ann Arbor: The University of Michigan Press.

ユスティヌス『ピリッポス史』：合阪學訳（1998）『ポンペイウス・トログス　ユニアヌス・ユスティヌス抄録　地中海世界史』京都大学学術出版会

ユリウス・ホノリウス『世界誌』：S. Monda (2008) *La «Cosmographia» di Giulio Onorio. Un excerptum scolastico tardo-antico*, Roma: Aracne. https://digiliblt.uniupo.it/xtf/view?query=;brand=default;docId=dlt000310/dlt000310.xml (2022 年 5 月 12 日最終閲覧)

ヨセフス『ユダヤ戦記』『ユダヤ古代誌』：秦剛平訳（1999–2000）『ユダヤ古代誌』（全 6 巻）筑摩書房；

秦剛平訳（2002）『ユダヤ戦記』（全 3 巻）筑摩書房（共に Kindle 版）
『ヨハネによる福音書』：聖書協会共同訳（2018）『聖書　旧約聖書続編付き　引照・注付き』日本聖書協会
ラヴェンナの逸名著者『世界地誌』：M. Pinder & G. Parthey (1860) *Ravennatis Anonymi Cosmographia et Guidonis geographica*, Berlin: Friderici Nicolai.
リウィウス『ローマ建国以来の歴史』：岩谷智他訳（2008–）『リウィウス　ローマ建国以来の歴史』（全 14 巻予定）京都大学学術出版会；米田利浩（1996–1997）「〈史料訳出・注解〉リウィウス，ローマ史『概要』」（全 2 編）『史流』36: *21–106; 37: *49–86.
ルカヌス『内乱』：大西英文訳（2012）『ルーカーヌス　内乱　パルサリア』（全 2 巻）岩波書店

事典・辞書類

Blaise = A. Blaise (1993) *Dictionnaire latin-français des auteurs chrétiens*, Turnhout: Brepols (réimpression anastatique).
CLA = E. A. Lowe (1934–1971) *Codices Latini Antiquiores: A Palaeographical Guide to Latin Manuscripts prior to the Ninth Century*, 12 vols., Oxford: Clarendon Press. https://elmss.nuigalway.ie (2022 年 5 月 12 日最終閲覧)
DNP = H. Cancik & H. Schneider (eds.) (1996–2003) *Der Neue Pauly: Enzyklopädie der Antike*, 16 Bände (in 19 Teilbänden), Stuttgart: J.B. Metzler.
Du Cange = Ch. du Fresne, sieur du Cange et al. (1883–1887) *Glossarium mediae et infimae latinitatis*, Niort: L. Favre. http://ducange.enc.sorbonne.fr (2022 年 5 月 12 日最終閲覧)
EIr = E. Yarshater et al. (eds.) (1985–) *Encyclopædia Iranica*, online edition, New York: Encyclopædia Iranica Foundation. https://www.iranicaonline.org/ (2022 年 5 月 12 日最終閲覧)
GG = O. Brunner, W. Conze & R. Koselleck (eds.) (1972–1997) *Geschichtliche Grundbegriffe: historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland*, Bd. 1 - Bd. 8/2. Stuttgart: Ernst Klett.
LMA = R. Auty et al. (eds.) (1980–1998) *Lexikon des Mittelalters*, München-Zürich: Artemis.
Niermeyer = J. F. Niermeyer (2002) *Mediae Latinitatis Lexicon Minus: Lexique latin médiéval - Medieval Latin Dictionary- Mittellateinisches Wörterbuch*, Leiden: Brill.
OCD = S. Hornblower, A. Spauforth & E. Eidinow (eds.) (2012) *The Oxford Classical Dictionary* (Fourth ed.), Oxford: Oxford University Press. DOI: 10.1093/acref/9780199545568.001.0001 (2022 年 5 月 12 日最終閲覧)
ODLA = O. Nicholson (ed.) (2018) *The Oxford Dictionary of Late Antiquity*, 2 vols., Oxford: Oxford University Press.
PLRE = J. R. Martindale (1980–1992) *The Prosopography of the Later Roman Empire*, vol. II: *A.D. 395–527*; vol. III: *A.D. 527–641*, 2 parts, Cambridge: Cambridge University Press.

RE = K. Ziegler et al. (eds.) (1894–1980) *Pauly's Real-Encylopädie der classischen Altertumswissenschaft. Neubearbeitung*, Stuttgart-München: J. B. Metzlerscher Verlag & Alfred Druckenmüller Verlag.

RGA = H. Beck et al. (eds.) (1973–2008) *Reallexikon der Germanischen Altertumskunde*, 2. Aufl., Berlin-New York: De Gruyter.

竹内啓一総編集（2012–2017）『世界地名大事典』（全 9 巻）朝倉書店

松原國師（2010）『西洋古典学事典』京都大学学術出版会

研究文献

Amory, P. (1997) *People and Identity in Ostrogothic Italy, 489–554*, Cambridge: Cambridge University Press.

Banchich, T. M. (2007) "The Epitomizing Tradition in Late Antiquity", in J. Marincola (ed.), *A Companion to Greek and Roman Historiography*, Malden, MA-Oxford-Victoria: Blackwell: 305–311.

Bergmann, R., P. Pauly & C. Moulin-Frankhänel (1999) *Alt- und Mittelhochdeutsch. Arbeitsbuch zur Grammatik der älteren deutschen Sprachstufen und zur deutschen Sprachgeschichte*, 5. Aufl., Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Bertelli, S. (2008) "Sul frammento dei «Getica» di Giordano conservato a Losanna", in F. T. Coulson & A. A. Grotans (eds.) *'Classica et Beneventana'. Essays Presented to Virginia Brown on the Occasion of her 65th Birthday*, Turnhout: Brepols: 1–8.

Bischoff, B. (1971) "Paläographische Fragen deutscher Denkmäler der Karolingerzeit", *Frühmittelalterliche Studien*, 5: 101–134.

Bjornlie, M. S. (2013) *Politics and Tradition between Rome, Ravenna and Constantinople: A Study of Cassiodorus and the Variae 527–554*, Cambridge: Cambridge University Press.

Bradley, D. R. (1995) "Manuscript Evidence for the Text of the 'Getica' of Jordanes", *Hermes*, 123: 346–362, 490–503.

Bradley, D. R. (1997) "Some Textual Problems in the 'Getica' of Jordanes", *Hermes*, 125: 215–230.

Castritius, H. (2005) "Stammesbildung, Ethnogenese", in *RGA*, 29: 508–515.

Christensen, A. S. (2002) *Cassiodorus, Jordanes, and the History of the Goths: Studies in a Migration Myth*, Copenhagen: Museum Tusculanum Press.

Coumert, M. (2007) *Origines des peuples. Les récits du Haut Moyen Âge occidental (550–850)*, Paris: Institut d'Études Augustiniennes.

Cristini, M. (2021) "Jordanes", in: *Biographisch-Bibliographisches Kirchenlexikon.* https://www.bbkl.de/index.php/frontend/lexicon/J/Jo/jordanes-or-jordanis-or-jornandes-85573 (2022 年 5 月 12 日最終閲覧)

Croke, B. (2003) "Latin Historiography and the Barbarian Kingdoms", in G. Marasco (ed.) *Greek and Roman Historiography in Late Antiquity Fourth to Sixth Century A.D.*, Leiden-Boston: Brill:

349–389.

Doležal, S. (2014) “Who was Jordanes?”, *Byzantion*, 84: 145–164.

Dörler, Ph. (2020) “Two Tales - Two Peoples? Goths and Romans in Jordanes’ Works”, in Heydemann & Reimitz (2020): 121–146.

Ford, R. (2020) “From Scythian, to Getan, to Goth: The *Getica* of Jordanes and the Classical Ethnographic Tradition”, in Heydemann & Reimitz (2020): 95–119.

Galdi, G. (2013) *Syntaktische Untersuchungen zu Jordanes. Beitrage zu den Romana*, Hildesheim: Olms.

Galdi, G. (2018) “Tre note ai Getica”, *Latomus*, 77(4): 1119–1122.

Galdi, G. (2019) “[Review of] Antonino Grillone, Iordanes. Getica, Paris, Les Belles Lettres, 2017”, *Latomus*, 78(3): 848–851.

Geschnitzer, F. (1992) “Volk, Nation, Nationalismus, Masse: II (Altertum)”, in *GG*, 7: 151–171.

Ghosh, S. (2009) *The Barbarian Past in Early Medieval Historical Narrative* (Ph.D. thesis), Toronto: University of Toronto.

Ghosh, S. (2016) *Writing the Barbarian Past: Studies in Early Medieval Historical Narrative*, Leiden: Brill.

Giese, W. (2004) *Die Goten*, Stuttgart: Verlag W. Kohlhammer.

Gillett, A. (2006) “The Goths and the Bees in Jordanes: A Narrative of No Return”, in J. Burke et al. (eds.) *Byzantine Narrative: Papers in Honour of Roger Scott*, Melbourne: Australian Association for Byzantine Studies: 149–163.

Gillett, A. (2009) “The Mirror of Jordanes: Concepts of the Barbarian, Then and Now”, in P. Rousseau (ed.) *A Companion to Late Antiquity*, Malden, MA: Blackwell: 392–408.

Goffart, W. (1988) *The Narrators of Barbarian History (A.D. 550–800): Jordanes, Gregory of Tours, Bede, and Paul the Deacon*, Princeton, NJ: Princeton University Press (pbk ed. with new preface 2005 , Notre Dame: University of Notre Dame Press).

Goffart, W. (2005) “Jordanes’s “*Getica*” and the Disputed Authenticity of Gothic Origins from Scandinavia”, *Speculum*, 80(2): 379–398.

Green, D. H. (1999) “Linguistic Evidence for the Early Migrations of the Goths”, in P. Heather (ed.) *The Visigoths from the Migration Period to the Seventh Century: An Ethnographic Perspective*, Woodbridge: The Boydell Press: 11–32.

Grundmann, H. (1965) *Geschichtsschreibung im Mittelalter. Gattungen - Epochen - Eigenarten*, Göttingen: Vandenhoeck.

Guttmann, M. A. (ca. 1840) *Katalog der Handschriften der Rehdigerana, Erste Abtheilung*, Breslau: Handgeschriebenes Buch.

Heather, P. (1989) “Cassiodorus and the Rise of the Amals: Genealogy and the Goths under Hun Domination”, *The Journal of Roman Studies*, 79: 103–128.

Heather, P. (1991) *Goths and Romans, 332–489*, Oxford: Clarendon Press.

Heydemann, G. & H. Reimitz (eds.) (2020) *Historiography and Identity II: Post-Roman Multiplicity and New Political Identities*, Turnout: Brepols.

Horster, M. & C. Reitz (2018) "Handbooks, Epitomes, and *Florilegia*", in McGill & Watts (2018): 431–450.

Kramer, R., H. Reimitz & G. Ward (eds.) (2021) *Historiography and Identity III: Carolingian Approaches*, Turnout: Brepols.

Kulikowski, M. (2018) "Classicizing History and Historical Epitomes", in McGill & Watts (2018): 143–159.

Liebeschuetz, J. H. W. G. (2011) "Making a Gothic History: Does the *Getica* of Jordanes Preserve Genuinely Gothic Traditions?", *Journal of Late Antiquity*, 4: 185–216.

Mandatori, G. (2017) " "But the calamity was complete and total". Mommsen, Giordane e i dotti inglesi", *Quaderni di Storia*, 86: 177–202.

Mathisen, R. W. (2015) "*Natio, Gens, Provincialis* and *Civis*: Geographical Terminology and Personal Identity in Late Antiquity", in G. Greatrex, H. Elton & L. McMahon (eds.) *Shifting Genres in Late Antiquity*, Farnham: Routledge: 277–286.

McGill, S. & E. Watts (eds.) (2018) *A Companion to Late Antique Literature*, Hoboken, NJ: Wiley Blackwell.

Mentzel-Reuters, A., M. Mersiowsky, P. Orth & O. B. Rader (2005) *Phönix aus der Asche. Theodor Mommsen und die Monumenta Germaniae Historica*, München-Berlin: Monumenta Germaniae Historica.

Merrills, A. H. (2005) *History and Geography in Late Antiquity*, Cambridge: Cambridge University Press.

Mussot-Goulard, R. (1999) *Les Goths*, Biarritz: Atlantica.

Plassmann, A. (2006) *Origo gentis. Identitäts- und Legitimitätsstiftung in früh- und hochmittelalterlichen Herkunftserzählungen*, Berlin: Akademie Verlag.

Pohl, W. & V. Wieser (eds.) (2019) *Historiography and Identity I: Ancient and Early Christian Narratives of Community*, Turnout: Brepols.

Rapp, C. (2005) "Literary Culture under Justinian", in M. Maas (ed.) *The Cambridge Companion to the Age of Justinian*, Cambridge: Cambridge University Press: 376–397.

Reimitz, H. (2015) *History, Frankish Identity and the Framing of Western Ethnicity, 550–850*, Cambridge: Cambridge University Press.

Reynolds, S. (1983) "Medieval Origines gentium and the Community of the Realm", *History. The Journal of the Historical Association*, 68: 375–390.

Reynolds, S. (1998) "Our Forefathers? Tribes, Peoples, and Nations in the Historiography of the Age of Migrations", in A. C. Murray (ed.) *After Rome's Fall. Narrators and Sources of Early Medieval*

History. Essays Presented to Walter Goffart, Toronto-Buffalo-London: University of Toronto Press: 17–36.

Rosivach, V. (1994) "*Anus*: Some Older Women in Latin Literature", *The Classical World*, 88(2): 107–117.

Rose, V. (1893) *Verzeichniss der Lateinischen Handschriften der Königlichen Bibliothek zu Berlin, Erster Band: Die Meermann-Handschriften des Sir Thomas Phillipps*, Berlin: Asher.

Springer, M. (2005) "Stamm und Staat", in *RGA*, 29: 496–502.

Springer, M. (2006) "Volk", in *RGA*, 31: 568–575.

Stover, J. A. & G. Woudhuysen (2021) "Jordanes and the Date of the *Epitome de Caesaribus*", *Histos*, 15: 150–188.

Tischler, M. M. (2021) "Remembering the Ostrogoths in the Carolingian Empire", in Krammer, Reimitz & Ward (2021): 65–122.

Van Hoof, L. (2019) "Vergilian Allusions in the *Getica* of Jordanes", *Latomus*, 78: 170–185.

Van Hoof, L. & P. Van Nuffelen (2017) "The Historiography of Crisis: Jordanes, Cassiodorus and Justinian in mid-sixth-Century Constantinople", *The Journal of Roman Studies*, 107: 275–300.

Van Hoof, L. & P. Van Nuffelen (2020) *The Fragmentary Latin Histories of Late Antiquity (AD 300–620)*, Cambridge: Cambridge University Press.

Wagner, N. (1967) *Getica: Untersuchungen zum Leben des Jordanes und zur frühen Geschichte der Goten*, Berlin: De Gruyter.

Werner, K. F. (1992) "Volk, Nation, Nationalismus, Masse: III. Mittelalter", in *GG*, 7: 171–186.

Westberg, F. (1904) *Zur Wanderung der Langobarden*, Санкт-Петербург: Типография Императорской Академіи Наукъ.

Wiener, L. (1920) *Contributions Toward a History of Arabico-Gothic Culture*, vol. III, Philadelphia, PA: Innes & Sons.

Wolfram, H. (tr. by T. J. Dunlap) (1988) *History of the Goths*, Berkeley-Los Angeles-London: University of California Press.

Wolfram, H. (1990a) *Die Goten. Von den Anfängen bis zur Mitte des sechsten Jahrhunderts. Entwurf einer historischen Ethnographie* (3 neubearbeitete Aufl.), München: C.H. Beck.

Wolfram, H. (1990b) "Einleitung oder Überlegungen zur Origo Gentis", in H. Wolfram et al. (eds.) *Typen der Ethnogenese unter besonderer Berücksichtigung der Bayern. Berichte des Symposions der Kommission für Frühmittelalterforschung, 27 bis 30 Oktober 1986, Stift Zwettl, Niederösterreich*, Wien: Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften: 19–33.

Wolfram, H. (1990c) "Le genre de l'Origo gentis", *Revue belge de philologie et d'histoire*, 68: 789–801.

Wolfram, H. (1994) "Origo et religio. Ethnic Traditions and Literature in Early Medieval Texts", *Early Medieval Europe*, 3: 19–38.

Wolfram, H. (2003) "Origo gentis. 1 Allgemeines", in *RGA*, 22: 174–178.

Wolfram, H. (2004) “Auf der Suche nach den Ursprüngen”, in W. Pohl (ed.) *Die Suche nach den Ursprüngen. Von der Bedeutung des frühen Mittelalters*, Wien: Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften: 11–22.

Woolf, G. (2011) *Tales of the Barbarian: Ethnography and Empire in the Roman World*, Chichester: Wiley-Blackwell.

Wright, R. (1982) *Late Latin and Early Romance in Spain and Carolingian France*, Liverpool: Cairns.

Ziegler, K. (1915) *Catalogus codicum Latinorum Classicorum qui in Bibliotheca Urbica Wratislaviensi*, Wratislavia: M. & H. Marcus.

Zientara, B. (1986) “Populus - Gens - Natio. Einige Probleme aus dem Bereich der ethnischen Terminologie des frühen Mittelalters”, in O. Dann (ed.) *Nationalismus in vorindustrieller Zeit*, München: Walter de Gruyter: 11–20.

足立広明（1999）「古代末期地中海世界における人の移動と社会変容」『岩波講座　世界歴史 19 移動と移民　地域を結ぶダイナミズム』，岩波書店 : 201–224

井上文則（2013）「3 世紀におけるゴート人の侵入」『西洋古代史研究』13: 1–23

エッシェー，カタリン & ヤロスラフ・レベディンスキー（新保良明訳）（2011）『アッティラ大王とフン族 「神の鞭」と呼ばれた男』講談社

岡地稔（1995）「ゲルマン部族王権の成立 －東ゴート族の場合－」佐藤彰一 & 早川良弥編『西洋中世史（上）－継承と創造－』ミネルヴァ書房 : 69–90

小澤実（2014）「ゴート・ルネサンスとルーン学の成立：デンマークの事例」ヒロ・ヒライ＆小澤実編『知のミクロコスモス：中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』中央公論新社 : 69–97

ギアリ，パトリック・J（鈴木道也・小川知幸・長谷川宜之訳）（2008）『ネイションという神話：ヨーロッパ諸国家の中世的起源』白水社

國原吉之助（2007）『新版　中世ラテン語入門』大学書林

クメール，マガリ＆ブリューノ・デュメジル（大月康弘・小澤雄太郎訳）（2019）『ヨーロッパとゲルマン部族国家』白水社（文庫クセジュ）

クルセル，ピエール（尚樹啓太郎訳）（1974）『文学にあらわれたゲルマン大侵入』東海大学出版会

佐々木博光（1992）「出自神話でみるドイツ史」『人文學報』71: 97–133.

佐々木博光（1997）「普遍史から国民史へ（上）ヨルダネス『ゲティカ』の成立と受容について」『歴史研究』35: 1–22

佐々木博光（1998）「普遍史から国民史へ（下）ヨルダネス『ゲティカ』の成立と受容について」『歴史研究』36: 85–136

佐藤彰一（1998）「古代から中世へ －ヨーロッパの誕生－」『岩波講座　世界歴史 7　ヨーロッパの誕生』岩波書店 : 3–78

佐藤彰一（2002）「戦う王，裁く王　－西ヨーロッパ初期王権論」『岩波講座　天皇と王権を考える２　統治と権力』岩波書店 : 83–104
佐藤彰一（2021）『フランク史Ｉ　クローヴィス以前』名古屋大学出版会
甚野尚志（1992）『隠喩のなかの中世 —西洋中世における政治表徴の研究』弘文堂
ゾイナー，フレデリック・E（国分直一・木村伸義訳）（1983）『家畜の歴史』法政大学出版局
谷口幸男（1999）「ヨルダーネスの『ゴート史』について」『大阪学院大学国際学論集』10(1): 61–91
玉置さよ子（1996）『西ゴート王国の君主と法』創研出版
タルバート，リチャード・J・A（野中夏美・小田謙爾訳）（1996）『ギリシア・ローマ歴史地図』原書房
出崎澄男（1986）「中世初期の民族史 — 歴史記述にあらわれたシュタム意識 —」上智大学中世思想研究所編『中世の歴史観と歴史記述』創文社 : 69–88
長友栄三郎（1976）『ゲルマンとローマ』創文社
橋本龍幸（1997）『中世成立期の地中海世界 : メロヴィング時代のフランクとビザンツ』南窓社
ヒューベル，ニルス（小澤実訳）（2008）「ネイションから見た中世デンマーク」『北欧史研究』25: 94–108
マラヴァル，ピエール（大月康弘訳）（2005）『皇帝ユスティニアヌス』白水社（文庫クセジュ）
ライミッツ，ヘルムート（加納修・田中玉美訳）（2012）「カロリング期における歴史叙述抜粋集の社会的論理」『Configuration du texte en histoire / 歴史におけるテクスト布置』名古屋大学大学院文学研究科 : 157–169
リシェ，ピエール（岩村清太訳）（1988）『中世における教育・文化』東洋館出版社

ヨルダネス『ゲティカ』

1．小舟に運ばれて穏やかな海岸沿いを航行し，誰かが言うように，古の者たちの池から小魚を集めようと望む私に，兄弟カスタリウス[1]よ，君は海原に向かって帆を広げる[2]よう強いる。そして私が着手した小品，すなわち「年代記の要約について」[3]とする作品を手放し，「ゲタエ人〔ゴート人〕の起源と行跡について」という 12 巻からなるセナトル[4]の書物を，遠い過去から数多の世代と王を経て現在にいたるまで，私たちの言葉でこの 1 冊の小さな本にまとめるよう促す[5]。［M2］とても厳しいだけでなく，またこの仕事の重荷を知ろうとしない者によって課された命令だ！かくも壮大な語りのラッパの音をならすには，私の息が弱いことに君は目を向けていない。しかしあらゆる困難にもまして辛いのは，彼〔カッシオドルス〕の思考を精察することができるほど十分に，それらの書を参照する機会が私たちに与えられていないことである。
2．私は嘘を言うつもりはない。以前に私は彼の家宰から恩恵を受け，それらの書を三日間かけて読んだ[6]。私はそれら書物の言葉を一語一語覚えているわけではないが，［そこに記述されている］考え方や出来事は記憶にとどめていると信じている[7]。［M3］それらの書物に，私はいくつか

1　カスタリウスはヨルダネスの他にはまったく言及されていない。「まえがき」参照。

2　Mommsen 版（1882）は受動態 laxari を採用しているが，英語訳もまた laxare とする Grillone 版（2017）に依拠している。

3　『ローマーナ』を指す。

4　カッシオドルスのこと（Magnus Aurelius Cassiodorus Senator, 485/490 頃 –580/585 年頃）。「まえがき」ならびに *DNP*, s.v. “Cassiodorus”; *ODLA*, s.v. “Cassiodorus” 参照。

5　同じ素材を用いた序文は，ルフィヌスがオリゲネス『ローマの信徒への手紙注解』を翻訳した作品にも見られるので，ヨルダネスがルフィヌスを模倣した可能性もある（cf. Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 221 n. 1）。参考のために小高訳（1990）を挙げておく。「私は小さな筏に運ばれ，平穏な砂浜の湾岸を航行し，ギリシア人らの潟で小さな小魚を捕らえたいと願っていたのですが，兄弟ヘラクリウスよ，あなたは私に，私の手掛けていた仕事つまりアダマンティウス（オリゲネス）翁の聖書講話の翻訳を途中で止めて，沖合で帆を張り，ローマの信徒宛のパウロの手紙を論じた十五巻から成る書を我々の言語（ラテン語）に翻訳するよう，私を強い，説き伏せようとしておられます。」

6　「家宰（dispensator）」は，家計の管理に責任を持つ奉仕人である。Relego は「読む」だけでなく，また「読み返す」の意味もあり，英語訳は後者を採用している。Wagner（1967）は，ヨルダネスがカッシオドルスの書を読んでその内容をカスタリウスに伝えたところ，その要約の作成を頼まれたために「読み返した」ことを，『ゲティカ』成立の契機とみなしている。

7　ここでは retinere の意味を生かすため，英語訳やイタリア語訳（「思い出す」）とは異なり，「 記憶にとどめる 」と訳した。なお，この一文はある微細な点で解釈が分かれうるところであり，フランス語版の訳者は「私はそれら書物の言葉をそのまま取り入れはしない」と訳し，『ゲティカ』の執筆方法そのものを指していると考えている。

のギリシア語とラテン語の歴史書から適切な事柄を加え，序と結語を付し，また本文に私の表現をたくさん混ぜ合わせた。
3．それゆえ君が要求したものを侮ることなく快く受け入れ，歓喜して読みなさい。敬愛する兄弟よ，もし何か説明不足のことがあれば，君が隣人としてこの民（ゲンス）について思い出すことを，私のために祈りながら付け加えなさい。主が君と共にあらんことを。アーメン。

I．4．オロシウスが伝えるように[8]，私たちの父祖は，大洋の境界によって周りを仕切られた大地の広がり全体を 3 つ[9]に区分し，その 3 つの部分をアシア，エウロパ[10]，アフリカと呼んだ。この大地の 3 つに分かれた空間については，数え切れないほどの書き手が存在し，単に諸都市や諸地方の位置を説明するだけでなく，さらにより紛れもない事実として，里程をも測っている[11]。またその者たちは，海流のなかに点在する島々，彼らがキュクラデス諸島やスポラデス諸島と名付ける大小の島々を，マレ・マグヌム〔大海〕[12]という巨大な海のなかに位置づけている。
5．誰も，渡ることのできない海の外縁を描こうとしないばかりか，そこに近づくことすらできない。なぜなら，海藻[13]が邪魔をし，風の息吹が静まるために[14]，渡れないと感じられるからである。そしてそれ〔外縁〕は，それを創造した彼〔神〕以外の誰にも分からない。6．私たちが全世界の円と呼んだその海の内側は，冠のようにその縁を取り囲んでおり，これについて書きたいと望む好奇心豊かな人々によって知られていた。というのも，大地の円は住民によって占められていて，その海にあるいくつかの島々は居住に適しているからである。たとえば東方とインド洋

8　オロシウス『異教徒を反駁する歴史』1.2.1. オロシウスはローマ帝国の属州ヒスパニア出身の司祭で，『神の国』の著者アウグスティヌスの指示で本作品を執筆したとされる（*ODLA*, s.v. “Orosius” 参照）。古代の地理認識は世界を 2 つ（アシアとエウロパ）に分ける見方と 3 つに分けるそれとのあいだで揺れ動いていたが，さらには 4 つに区分することもあった。こうした多様な見方は 6 世紀においても併存していた（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 222 n. 11）。オロシウスの用いた史料との関連で古代の世界区分の方法に触れている Merrills（2005: 70–79）も参照。
9　ここでは写本に根拠を持たない Grillone 版の triquetrum（「三角形の」）ではなく，Mommsen 版の triquadrum を採用した。
10　Mommsen 版は Eoropa と読むが，Europa の綴りもクラス I に属する L 写本等に見られる。ここでは慣用表記に従う。
11　「里程（mille passus）」はローマ時代の長さの単位。*OCD*, s.v. “mesures of length” によれば，約 1,480 メートル。
12　地中海のことを指すと考えられている。
13　Ulva. 英語訳はウェルギリウス『アエネーイス』6.415–416 からの引喩だとして，sedge（湿地帯に生えるカヤツリグサ科の草やショウブなどを指す）を採用する。小川訳（2004）では「ようやく川を渡り，無事に巫女と勇士とを／見にくい泥と鉛色の葦の上に陸揚げする」。
14　タキトゥス『アグリコラ』10 が典拠の可能性がある（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 223 n. 16）。

にはヒッポポデス[15], ヤムネシア[16], 太陽に焼かれる場所[17]が存在し, 居住できないとはいえ, その空間は長さと幅において非常に広大であった[18]。またタプロバネ[19]があり, そこには町[20]と所領を除いて，きわめて堅固に城塞化された，きらびやかな都市が10ある[21]。［M7］また，とても快適なシレファンティナ[22]ならびにテロン[23]は, いかなる書き手によっても明らかにされていないが, その住民によって十分な名声を得ている[24]。

7. この海の西方には頻繁な人の往来のおかげで，ほとんどすべて［の書き手］によって記された多数の島々がある。またガディタヌス海峡[25]の近く，さほど離れていないところにベアタ〔祝福された〕島とフォルトゥナタ〔幸運な〕と呼ばれる島がある[26]。幾人かは島嶼部の中にガラエキア[27]とルシタニア[28]という一対の岬を置いている（そのうちのひとつにヘラクレスの神殿が, もう一方にはスキピオ[29]の記念建造物が見られる）。けれども，それらはガラエキアの地の果て

15　クラスI写本に基づくMommsen版ではHyppodes。写本によって綴りは多様であり，Grillone版が依拠し，「ヒッポポデス（hippopodes）」とするのは，クラスIIIのZ写本のみである。本来は「馬の脚を持つ人々」の意味だが，ユリウス・ホノリウス『世界誌』では島とされている。ユリウス・ホノリウスの作品はカッシオドルスにも知られていたので，間接的な引用かもしれない（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 223 n. 20）。

16　この島については不明。

17　構文からは，この場所がヤムネシアを指すのか別の島を指すのかを確定するのは不可能とされている。

18　島々の列挙は，ユリウス・ホノリウス『世界誌』3に基づく。

19　セイロン島（スリランカ）を指す。

20　Oppidum. 現代語訳は「町」（英語訳とイタリア語訳）あるいは「村」（フランス語訳）,「小都市」（ドイツ語訳）としている。続く文章から「町」あるいは「都市」と考えられるので，oppidumを「町」, urbsを「都市」とした。またcivitasも「町」と訳す。

21　オロシウス『異教徒を反駁する歴史』1.2.16.

22　不明。

23　不明。

24　ひとつの写本（A）にしか見られない “possessionibus…refertas” を選んだGrillone版ではなく，Mommsen版の “possessoribus…refertas” を採用する。前者に依拠すれば「豊富な地所で満たされている」となる。

25　ガディタヌス（Gaditanus）は大西洋岸のカディスを指す。現在のジブラルタル海峡にあたる。

26　カナリア諸島と推測されることが多い。オロシウス『異教徒を反駁する歴史』1.2.11とポンポニウス・メラ『地誌』3.102は，複数形で言及している。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 224 n. 29）によれば，島の数が2つであったとする伝統があり（プルタルコス『英雄伝』「セルトリウス伝」8），ヨルダネスは彼の史料に見出される複数形を，似た名前を持つ2つの島として書き換えた可能性がある。

27　ローマ帝国の属州名。イベリア半島北西部。なお写本にはGallaeciaの綴りは証明されないが, 慣用として「ガラエキア」の表記を採用する。Mommsen版ではGalliciaである。

28　ローマ帝国の属州名。現在のポルトガルおよびスペイン西部にあたる。Grillone版が採用するLusitaniaの表記は3つの写本（BXY）に見られる。Mommsen版ではLysitania。

29　ポンポニウス・メラ『地誌』3.4. 紀元前108年にルシタニア人を征服したのはCaepioと呼ばれる人物であ

につながっているので，海に浮かぶ島々というよりは，むしろエウロパの広大な大地に属する。
8．それはそれとして，この海はその荒波のなかにバレアレスと呼ばれる他の島々を有している[30]。またすべての地が開墾されているわけではないが，メウァニア島[31]と，33 島からなるオルカデス諸島[32]を有している。［M9］また西部の最果てにテュレと呼ばれる島があり，それについてマントゥア人はとくに「最果てのテュレが君に仕えるように」［と書いている］[33]。
9．この巨大な海にはそのおおぐま座の方角，すなわち北部にスカンザと呼ばれるとても広大な[34]島がある[35]。もし主が助け給うなら，そこから私たちの物語が始まるべきである。なぜなら，君がその起源を書くよう求める民（ゲンス）は，この島の中心から蜜蜂の群れ[36]のように激しく飛び出して

る。ヨルダネスは Scipio と Caepio を混同していると想定される。ポンポニウス・メラによれば，Caepio を記念して作られた灯台を指す。

30　ユリウス・ホノリウス『世界誌』16; オロシウス『異教徒を反駁する歴史』1.2.102.「その荒波のなかに（“in suo aestu”）」と訳した部分は，英語訳，フランス語訳，イタリア語訳では「膨らんだ部分に」，ドイツ語訳では「大量の水の中に」とされている。

31　おそらくマン島。

32　オークニー諸島は実際には 67 の大きな島とそれなりの数の小島からなる。古代においてオークニー諸島の数は作者によって異なる。ポンポニウス・メラによれば 30，プリニウスによれば 40 とされている（Devillers 1995: 127 n. 7）。

33　ウェルギリウス『農耕詩』1. 30。小川訳（2004: 78）参照。『ゲティカ』写本では Thyle と綴られているが，『農耕詩』ではトゥレ（Thule）と表記されているので，以下ではトゥレとする。マントゥア（マントヴァ）生まれのウェルギリウスをこう呼ぶ方法はカッシオドルスにおいて一般的なので，この引用はカッシオドルスに遡るかもしれない。しかし後代の詩歌集からの引用の可能性もあるため，ヨルダネスがウェルギリウスを直接読んでいたと考える必要はない。トゥレはマルセイユのピュテアス（紀元前 4 世紀の地理学者，探検家）の旅行の最終到達地であり，古典作品で大地の最北端とされているが，同定は難しい。シェトランド諸島，フェロー諸島，あるいはアイスランドの可能性が指摘されている（以上の記述は，主に Devillers 1995: 127 n. 8 に基づく）。タルバート（1996: 55）も参照。ヨルダネスと同時代に執筆されたプロコピオス『戦史』6.14–15 にもトゥレが登場するが，そこではスカンディナヴィア半島を指しているとされる。

なお Mommsen 版を底本とする英語訳は，『ゲティカ』9 節の始まりについては Grillone 版の区分に従っているが，その理由は明示されていない。

34　Mommsen 版は amplam（「広大な」）。

35　Grillone 版が採用する Scandia は写本には見られない。Mommsen 版の Scandza に基づき，本訳でもスカンザと表記する。別の箇所では Scandzia（『ゲティカ』16），Scandia（『ゲティカ』23）とも綴られる。一般にスカンディナヴィア半島を指すと考えられているが，ヨルダネスにおいては北方の島として描かれている。

36　蜜蜂の象徴的意味は多様であり，規律正しく働く集団を指したり，偉大な人物となることを予兆するとみなされたりもしたが，他方で凶兆を示すこともあった。邦語文献として，甚野（1992: 22–68）。この比喩は，まさしくヨルダネスが（そしておそらく読者や聴衆も）古典作品に親しんでいたことを示唆するが，Gillett（2006）によれば，『ゲティカ』19 における言及と合わせて，ゴート人が完全に故郷から離れてそこに戻らない集団で

エウロパの大地にやってきたからである。いかなる仕方で，どのようにして彼らがやってきたかについては，主が恵み給うならば，私たちは続く文章で説明しよう。

II. 10. しかしここでは，ヒスパニア[37]，ガリア，ゲルマニアに挟まれた海の湾曲部にあるブリタンニア[38]島について，できるかぎり手短に説明しておこう。リウィウスが伝えるように[39]，かつて誰もその大きな島を一周したことはなかったが，この島を語るにあたっては，多くの者によって様々の意見が提出されている。ユリウス・カエサルは，長いあいだローマ軍によって攪乱されることのなかった[40]この島を，名誉のためだけに行った幾度かの戦によって開いた[41]。以後，交易や他の様々な理由から多くの人々が往来するようになったこの島は，続く時代に等閑視されることなく[42]，より明瞭にその状況を露わにした。私たちは，ギリシア語とラテン語の作者から受け取ったことを，受け取ったとおりに以下で述べることにする[43]。
11. 多くの作者たちは，それ〔ブリタンニア〕が三角形にそっくりで[44]，北と西の方に向かって広がっていること，［その］大きな一角がライン川河口を見晴らし，そこから斜めに幅が狭くなって後方に引っ張られた後，他の二つの角へとつながり，一対をなす長い面が［それぞれ］ガリ

あることを描こうとしたヨルダネスの語りの重要な一要素を構成する。

37　Grillone 版が採用する Hispania の表記はクラス III の一部の写本（XY）でしか証明されない。Mommsen 版では Spania。

38　Grillone 版が採用する Brittannia の表記は写本から証明されないが，慣用に合わせて「ブリタンニア」とする。Mommsen 版では Brittania。

39　タキトゥス『アグリコラ』10 を通じた孫引き。リウィウス（紀元前 59 頃 – 紀元 17 年頃 : *DNP*, s.v. “Livius [III 2] L., T.”）はその『ローマ建国以来の歴史』105 巻（要約しか残っていないが，カエサルの遠征を扱っている）でブリタンニアについて叙述している（Devillers 1995: 128 n. 11）。なお，Livius の表記は 2 つの写本（AB）にしか現れず，他はすべて Libius と綴っている。

40　ここでは文脈も考慮に入れて，クラス I 写本に基づく Mommsen 版の inaccensam を採用した。他の諸写本に現れる inaccessam（Grillone 版）を採れば，「ローマ軍に接近されないままであった」となる。

41　ポンポニウス・メラ『地誌』3.49; タキトゥス『アグリコラ』10.

42　紀元前 55 年と 54 年にカエサルが二度遠征を行った。ブリタンニアは紀元後 43 年にローマ帝国の属州となった。

43　ブリタンニアに関する章は引用が豊富だが，情報の多くはおそらくポンポニウス・メラ『地誌』に基づく（Devillers 1995: 128 n. 13）。ただし，ここではその名前は言及されていない。

44　ここでは Grillone 版の “triquetram…, cuneo similem” ではなく，Mommsen 版の “triquadram…consimilem” に従う。「楔に似た（“cuneo similem”）」は写本において証明されないからである。ただし，ヨルダネスが依拠としたとされるポンポニウス・メラ『地誌』3. 50 とタキトゥス『アグリコラ』10 はともにブリタンニアに言及するときに，「楔」の比喩を用いていることを付記しておきたい。Grillone（2017: 279–280 n. 73）参照。

ア[45]とゲルマニアに向いていると述べていた[46]。12. その幅は最も広いところで2,310スタディオン[47]あり, 長さは7,132スタディオンを超えていないと言われている[48]。［M12］［そこには］茂みや森の散在する平原が広がっていて，いくつかの山々によって大きくなってさえいて，穏やかな海によって周りを囲まれている。その海は橈を漕ぐ力にたやすく屈することはなく，風の息吹によって帆を張るのを可能にしない。私はこれを信じている。というのも私の考えでは，大地からかなり遠く離れているため，動きをもたらす要因を拒んでいる[49]からであり，とりわけそこでは他の場所よりも，海がより遠くまで広がっているのである。13. その一方で，有名なギリシア人の作家ストラボンは次のように伝えている[50]。大洋の頻繁な浸蝕によって大地が湿気に晒されているために，それ〔ブリタンニア〕は大量の霧を発散し，太陽は覆い隠されてしまい，このためほぼ一日中，澄んだ空はさらに汚れてしまい[51]，視線を拒んでいるほどである。［M13］また夜はその最果ての部分においてより明るく，きわめてその時間が短い。さらに年代記作家コルネリウス[52]は次のように語っている[53]。そこには数多くの鉱脈があり, 植物があふれ, 人間以上に動物を育むあらゆるものがとても豊富であり，またそこには数多くの大きな川が流れだしたり，逆流し

45　ドイツ語訳には「ガリア」が欠如している。

46　ポンポニウス・メラ『地誌』3.50. 原文は，“…geminoque latere longiore Galliae praetendi atque Germaniae”。フランス語訳は「それぞれが，長い面ではガリアに，そしてもう一方ではゲルマニアに面している」として，“latere longiore” を Galliae にのみかかっていると解釈する。

47　*OCD*, s.v. “measures of length” に基づけば，1スタディオンは約185メートル。

48　カッシウス・ディオ『ローマ史』77.12.

49　フランス語訳は「波のうねりをもたらす理由を取り除く」。英語訳は「いかなる動きも抑えつけている」。ドイツ語訳はフランス語訳に近く，「激しい動きをもたらすすべての原因が排除されている」。

50　ストラボン『地理誌』4.5.2. ヨルダネスが名指しでストラボン（紀元前64/63– 紀元24年頃：*DNP*, s.v. “Strabon”）を引用するのはここだけだが，『ゲティカ』のとりわけ前半部では彼の『地理誌』がしばしば利用されている（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 70）。

51　この一節，“per illum pene totum foediorem qui serenus est diem,…”（Mommsen 版：“per illum pene totum fediorem, qui serenus est, diem…”）は，foedior（この綴りは Grillone による修正であり，写本では fedior だが，この単語が欠落しているものもある）の意味について解釈が分かれる。英語訳は「穏やかだが, むしろ恐ろしい（horrible）日中」，ドイツ語訳は「不快な（hässlich）日中」として，人々の感情を示す形容詞を採用するが，ここでは気象の描写と捉えるフランス語訳と同様の立場を取る。ヨルダネスが依拠するストラボンにおいても，自然現象の描写以上のことを読み取れないからでもある（前註参照）。イタリア語訳は「暗い（buia）」の語を用いている。

52　タキトゥス（55頃–120年頃：*DNP*, s.v. “Tacitus [1] (P.?) Cornelius T.”）のこと。ヨルダネスは数箇所でタキトゥスを利用しているが，名指しで言及するのはここだけである。

53　Mommsen 版の句読点の付け方にしたがう英語訳は，「また年代記作者コルネリウスが語るように，夜はその最果ての部分においてより明るく，きわめてその時間が短い」とするが，典拠とされる『アグリコラ』10には夜に関する記述は見当たらない。

たりして，宝石と真珠を磨いている[54]。
14．シルレス人たち[55]の見た目は日焼けしている[56]。彼らの多くは黒い縮れ毛で生まれてくる。カレドニア[57]に住む者たちは，赤々と燃える頭髪をもっていて，身体は大きいが弱々しい。彼らは面している場所に応じてガリア人やヒスパニア人に似ていて，［M14］そこから幾人かは，そこ〔ブリタンニア〕が近さゆえにそれらの地域から隣人を引き寄せて受け入れたと推測した[58]。すべての民衆も民衆の王たちも教養がない[59]。非常に有名な年代記作家ディオは，すべての者たちはただカレドニイ人とメアタエ人[60]という［二つの］名前でまとめられていたとしている[61]。彼らは枝で作られた家に住み，家畜と共に同じ屋根の下に住み，しばしば森を家にしている[62]。［M15］それが装飾のためか別の理由によるのか私にはわからないが，彼らは鉄を体に塗っている。15．彼らは支配への熱意からか，あるいは持ち分を増やすためか，単に騎兵や歩兵だけでなく，また二頭立ての馬車や，彼らが俗語で「エッセダ」と呼ぶ鎌を装備した戦車を用いて，たがいに頻繁に戦をする[63]。ブリタンニア島の構成については以上の僅かなことを述べれば十分であろう。

54　ポンポニウス・メラ『地誌』3.51.

55　ウェールズ南東部のケルト系の集団。

56　ここでは colorati を「日焼けした（basanés）」とするフランス語訳に従ったが，別の解釈もあり得る。英語訳とイタリア語訳は，おそらくタキトゥス『アグリコラ』11 の文言も考慮に入れて「黒ずんだ（dark, scuro）」とする一方で，ドイツ語訳は「入れ墨をしている（tätowiert）」として，顔面への粉飾の可能性を想定しているとみられる。

57　ブリテン島の北部。ほぼスコットランド地方にあたる。写本では Calydonia であるが，慣例に則り「カレドニア」とした。続く文章で言及されるこの地域の住民についても，「カレドニイ人」としたが，写本では Calydonii である。

58　タキトゥス『アグリコラ』11.

59　ポンポニウス・メラ『地誌』3.51–2.

60　スコットランド南部の集団。

61　カッシウス・ディオ『ローマ史』77. 12. Grillone（2017: 281–283 n. 88, 330–331 n. 354）によれば，ヨルダネスはカッシウス・ディオとディオン・クリュソストモス（40 頃 –112 年以降。その弁論は数多く伝存するが，大半の著作は今日まで残っていない。*DNP*, s.v. “Dion [I 3] D. Cocceianus von Prusa”）を混同している。『ゲティカ』40, 58, 65, 150 および Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 72–74）を参照。

62　ストラボン『地理誌』4.5.2.

63　ポンポニウス・メラ『地誌』3.52. Esseda はカエサル『ガリア戦記』4.33.1 以来ラテン文学で頻繁に証明される。ポンポニウス・メラは covinnus（鎌付き戦車）という言葉を使っている。

III. 16. 上で書き残していたスカンジア[64]島の状況に戻ろう。これについて，実際のところ，優れた大地の描き手であるクラウディオス・プトレマイオス[65]は，その著作の第2書において次のように言及して述べている。「大洋の北の果てにスカンザと呼ばれる大きな島があり，それはシトロン[66]の葉っぱの形で湾曲し，細長く伸びて閉じている」[67]。またポンポニウス・メラ[68]はそれがコダヌス海湾[69]に位置していたと伝えている[70]。
17. 大洋がその〔コダヌス海湾の〕沿岸に流れ込んでおり[71]，［M17］その島〔スカンザ〕はウィストゥラ川[72]に面している。この川はサルマタエの山々に発し，スカンザに面して三方に分かれて北の大洋に注いでいて，ゲルマニアとスキュティア[73]を分けている。この島の東側には，大地

64　写本にはScandzia, Scandiza, Scanda, Scanziaなどの表記が確認されるが，ここではMommsen版のScandzia（HPLYZ写本）に従う。

65　慣用に従って「クラウディオス・プトレマイオス」とするが，写本ではMommsen版が採用するClaudius Ptolemeusなど多様な綴りが見られる。プトレマイオス（2世紀：*DNP*, s.v. “Ptolemaios [65] Klaudios P.”）は『ゲティカ』16および19に名前が登場する。

66　Mommsen版はクラスI写本のcetriを採用するが，他にcitri（XYZ）やcedri，coedriの表記が見られる。ここではcitriを採用するGrillone版に従う。英語訳はレモンとしているが，古代地中海世界で広く栽培されていたのはシトロンである。

67　プトレマイオス『地理学』2.11.16. しかしシトロンは言及されていない。

68　紀元43/44年頃にラテン語で『地誌』を著したポンポニウス・メラ（*DNP*, s.v. “Pomponius [III 5] P. Mela”）は，『ゲティカ』ではこの箇所でのみ言及されるが，その他の場所でも頻繁に利用されている（『ゲティカ』7, 10–18, 30–32, 44–46, 51–54, 75, 230）。

69　英語訳とドイツ語訳の註では「カテガット海峡」。フランス語訳とイタリア語訳は，キール湾かカテガット海峡として断定を避けている。

70　ポンポニウス・メラ『地誌』3.31はコダヌス海湾に初めて言及する際，スカンディナヴィアについては語っていない。『地誌』3.54でコダヌス海湾にある島々の一つとして現れるCodannoviaをスカンディナヴィアと同定する見方もある（cf. Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 228 n. 60）。

71　Grillone版は，コダヌス海湾を先行詞とする関係代名詞cuiusを17節の始まりとし，本稿もそれに従ったが，Mommsen版の節区切りを採用すれば，「またポンポニウス・メラはそれが，大洋がその沿岸に流れ込むコダヌス海湾に位置していたと伝えている」となる。実際に『地誌』3.31において，用いられている単語は異なるが（「大洋（oceanus）」ではなく「海（mare）」，「沿岸」については，ripaではなくlitus），「海は湾岸の一番奥まで入ってはいる・・・」（飯尾訳 1999）とする説明が見られるので，ここではMommsen版の区切りの方が適切な可能性がある。

72　現在のポーランドを流れるヴィスワ川。ポンポニウス・メラ『地誌』3.33ならびにプトレマイオス『地理学』2.11.4, 3.5.5参照。

73　かつてスキュタイ（スキュタエ，スキュティア）人が住んでいた地域を指すが，ヨルダネスの理解では黒海北岸よりもはるか北，大陸の北岸部にまで広がる（Coumert 2007: 72–74）。

の懐に巨大な湖があり，この湖を水源とするウァグス川[74]が胎から生まれたかのごとく[75]，荒々しく大洋に注いでいる。また西側では果てしない海に，さらに北では同じく航海不可能な広大な大洋に囲まれていて，その海からまるで腕のように入り江が広がってゲルマニア海[76]ができている。
18．さらにそこには，小さいながらも数多くの島々があると報告されており[77]，酷寒のために海が凍結してオオカミがそこに渡ったとしても，彼らは光を奪われると言われている[78]。このように，その大地は単に人間を歓迎しないばかりか，また野獣にとってさえも過酷である。
19．ところで，私たちが説明をはじめるスカンザには，数多くの様々の民（ナティオネス）が住んでいるが，プトレマイオスはそのうちの7つの名前しか挙げていない[79]。酷寒のためそこでは蜜を作る蜜蜂の群れはどこにも見当たらない[80]。その北部にはアドギト族（ゲンス）がいて，彼らは真夏には40日と40夜のあいだ絶えず光を享受する一方で，冬には同じ数の日夜，明るい光を知らないと言われている[81]。［M20］こうして悲しさと喜びが交互に現れ，［蒙る］恩恵や損害は他の人々と異なっている。
20．なぜこうした状況なのか。なぜなら，日が長いときには，彼らは太陽が水平線の縁を通って東に戻ってくるのを見るからであり，逆に日が短いときには，太陽は南の星座を通ってくるため，彼らにはそのようには見えず，私たちには太陽が最も低いところから昇るのが見られるのに対して，彼らにあっては大地の縁を廻っていると言われるのである[82]。
21．またそこには，食糧を穀物に求めるのではなく，野生動物の肉と鳥の卵を食べて暮らしているスクレレフェンナエの諸族（ゲンテス）[83]がいる。そこには［動物の］種（ゲヌス）の増加と人々（ゲンス）の繁栄のために十分な量を供給するのを保証するほど，多くの動物の仔が沼地に住んでいる。そこにはまた，テュリ

74　湖と川の同定については多様な見解が提出されている。Vagus は放浪者の意味を持つため川を指す言葉として使われたが，英語訳はこの語の使用を，ヨルダネスが身体のメタファーを好んだことと結びつけている（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 228 n. 62）。

75　『ヨハネによる福音書』7.38 に基づく可能性がある（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 228 n. 63）。

76　バルト海。

77　Cf. ポンポニウス・メラ『地誌』3.31.

78　ソリヌス『驚異譚集成』22.9(11) は，トゥレの北の海は凍っていると述べている。カッシオドルスを通じた孫引きかもしれない（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 77–78）。英語訳は “ob nimium frigus”（「酷寒のために」）を，狼が視野を失う理由にしている。

79　プトレマイオス『地理学』2.11.16.

80　ウェルギリウス『農耕詩』4.35–36 参照。蜜蜂への言及の意義については，訳註 36 参照。

81　アドギト族については不明。40 日夜の連続は不正確であり，むしろ 55 ～ 60 日間が相応しい（Devillers 1995: 129 n. 24）。またこの特徴は，たいていトゥレと結びつけられていた。プリニウス『博物誌』2.77; ポンポニウス・メラ『地誌』3. 57 など。

82　この説明はヨルダネスに独自とされている（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 229 n. 74）。

83　プロコピオス『戦史』6.15.16 はトゥレ住民として Scritiphini（Σκριτίφινοι）を挙げ，彼らが野生動物の肉だけで生きているとしている。

ンギ人[84]と同様に駿馬を用いる別の民（ゲンス），すなわちスエハンス人[85]がいる。ローマ人が使用するためのサファイア色の毛皮[86]を，数えられないほど多くの他の民（ゲンテス）を通じた交易によってもたらしているのも，これらの人々である。彼らは黒い毛皮の装飾によって有名であり，貧しい生活をしているとはいえ，とても豊かに着飾っている。

22. 様々な集団（ナティオネス）の群れが続く。テウステス[87], ウァゴート[88], ベルギオ[89], ハリン[90], リオティダ[91]である。彼らはみなひとつの肥沃な平原に居住地を持っており，このために他の民（ゲンテス）の侵入に悩まされている。これらの次に, アヘルミル[92], フィンナイタエ[93], フェルウィル[94], 激しい気性をもつ集団（ゲヌス）ですぐに戦に走るガウティゴート[95]，それから，ミクシ，エウァグレ，オティンギスがいる[96]。これらすべては野獣のように岩壁に穴をうがって，そこを要塞のようなものとして住み着いてい

84　Grillone 版の Thoringi ではなく，Mommsen 版 Thyringi を採用する。写本ではさらに多様な綴りが証明される。フランス語訳は Thoringes，ドイツ語訳は Thyringer としており，同定を避けているようだが，テューリンゲン人と考えるのが一般的である。なおカッシオドルス『雑纂』4.1.3 においてテューリンゲン人の馬は駿馬として称賛されている。

85　不明。ドイツ語訳の註によれば，スウェーデン中央部の住民（Möller 2012: n. 48）。

86　何の動物の皮かについては，様々な見解が提出されている。

87　スウェーデンの Småland 地方の Tjust 島住民とみなされてきた。

88　不明。名前は「ゴート」系であることを示している。

89　スウェーデンの Bjäre härad 住民とみなされてきた。

90　スウェーデンの Halland 地方の住民とみなされてきた。

91　不明。

92　不明。

93　ヨルダネスのみで知られる。スウェーデンの Vätter 湖近くに住んでいた集団か。

94　スウェーデン南西部 Halland 地方 Fjäre 住民。

95　スウェーデン南部のどこかにいた集団。

96　この文章については，Mommsen 版に従うのが賢明であると判断した。Grillone 版は，Wagner（1967: 183–184）の主張に基づいて，“dehinc Mixi, Evagre, Otingis” を，“dehinc Ostrogothae mixti etiam Greotingis”（「さらにグレオティンギと融合した東ゴート人」）と読み替えているが，写本にまったく根拠を持たない。Grillone による修正は，東ゴート人がグレオティンギ（アンミアヌス・マルケリヌス『歴史』31.4.12 では Greuthungi）と融合したとするクラウディウス・クラウディアヌス『エウトロピウス駁論』2.141–159 の記述に基づいているが，この作品は英語訳がヨルダネスの典拠として挙げる文献には含まれていない。さらに，一文を挟んで言及される「東ゴート人」（Ostrogothae）を，dehinc と Mixi（もしくは mixti）のあいだに挿入するのは，すべての異本と照らし合わせてみても無理がある。それゆえ, ここでは Christensen（2002: 296–299）の見解にしたがった。ただし，ミクシ，エウァグレ，オティンギスは他では知られておらず，Mommsen（1882: 59）もまた otingis については，Greutungis の可能性を指摘している（cf. Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 230 n. 88）。

る[97]。23．彼らの外側にオストロゴタエ〔東ゴート人〕[98], ラウマリキ[99], アエラグナリキイ[100], スカンザの全住民のなかで最も柔和で，最も穏やかなフィンニ[101]，ならびに彼らの同類であるウィノウィロト[102]がいる。この民（ゲンス）[103]のなかには, 他の人々より大柄なことで知られるスエティディがいて[104], ヘルリ人[105]をその居住地から追い払ったデーン人も同じ祖先に由来する[106]。ヘルリ人は, スカンディア[107]のすべての民（ナティオネス）の中で突出した背の高さを誇っているが故に，自らに特別の名前を要求している[108]。24．さらにこれらのなかには, グランニイ[109], アウガンジ[110], エウニクシ[111], タエ

97　ウェルギリウス『農耕詩』3.376 におけるスキュティア人の描写参照。

98　ここでも Mommsen 版に従う。Grillone 版に基づけば,「彼らの外側にラウマリキとラグナリキ・・・がいる（“Sunt et his exteriores Raumarici ac Ragnarici, Finni mitissimi,…”）」。訳註 96 参照。

99　ノルウェーの Romerike 地方の住民。

100　ノルウェーの Ranrike 地方の住民。なお，写本では “raumariciae ragnaricii”（HPVL），“raumaricie ragnaricii”（A），“raumaricae ragnarici”（OBXY）と記されているため，ae（e）は「ラウマリキ」の語尾とみなされた可能性がある。Grillone 版が修正するごとく（訳註 98 参照），ae がもともと ac であった可能性も排除されない。

101　フィンニ（Finni）は，いわゆるフィン人を指すとされる。これに関連すると想定されるヨルダネスより古い証言としては，プトレマイオス『地理学』3.5.8 におけるサルマティアの「フィンノイ（Φίννοι）」という小集団や, タキトゥス『ゲルマニア』46 に登場する「フェンニ（Fenni）」が挙げられる程度である（*RE*, s.v. “Fenni”; *DNP*, s.v. “Fenni”）。

102　Grillone 版は “Vinoviloth Suetidi” を, Vinouil と Othsuetidi と読み替えているが, 写本に根拠を持たないので, ここでは Mommsen 版にしたがった。Vinoviloth は不明。

103　単数形で gens とされているが，文脈からスカンザの全住民を指していると考えられる（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 231 n.95）。

104　スエティディはストックホルムのすぐ北にある Uppland 地方のどこかにいた集団と目される。

105　ヘルリ人は，267 年から 268 年にかけてギリシアやバルカン半島を「スキュティア人」と共に襲撃したことが知られる。5 世紀初めにフン人に吸収されるが，454 年もしくは 455 年にはドナウ川支流のモラヴァ川沿いに王国を築いていた（*ODLA*, s.v. “Heruli”; *DNP*, s.v. “Heruli”）。『ゲティカ』117−119 で再び言及される。

106　『ゲティカ』23 は，プロコピオス『戦史』6.15.3 と並んでデーン人（Dani/Δανοί）に言及する最古の文献である（ヒューベル 2008: 94–96）。

107　Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 231 n.98）は，ここでは Scandza ではなくプトレマイオスが用いていた Scandia（Σκανδία）が使われているとするが,「スカンディア」の表記をとる写本は H, P, V の 3 つのみである。加えてこれら 3 写本は, プトレマイオスを引用する『ゲティカ』16 において「スカンザ（Scandza）」と綴っている。

108　ヘルリ人は 3 世紀からゴート人と結びつけられてきた（井上 2013: 11–15）。

109　Grillone 版の Granii は L 写本にしか見られないため，Mommsen 版の Grannii を採用する。ノルウェー南部 Grenland 地方にいた集団と考えられている。

110　ノルウェー南部 Agder 地方のどこかに居住していた集団とみなされている。

111　不明。

テル[112], ルギ[113], アロキ[114], ラニイ人[115]がいて[116], 数年前まではロドウルフが彼らの王であった[117]。この王は自身の王国を軽視してゴート人の王テオドリック[118]の懐に飛び込み, 求めていたとおりのものを見出した。これらの民(ゲンテス)は，肉体と精神においてゲルマン人よりも優れており，野獣のように獰猛に戦った[119]。

IV．25．それゆえにゴート人はその昔，このスカンザ島から，まるで諸民族(ゲンテス)の工房，あるいはともかくも諸部族(ナティオネス)の鞘からかのように[120], ベリグ[121]という名の王と共に出て行ったと記憶されている。船出した人々は陸地に到達するやいなや，その土地に名前を与えた。すなわち今日でもその地は，言われているところでは，ゴティスカンザと呼ばれている[122]。26．それからすぐに，大洋

112　不明。写本に根拠を持たない Grillone 版の Thelae ではなく，Mommsen 版の Taetel を採用した。

113　タキトゥス『ゲルマニア』43 に初めて言及され，オーデル川とヴィスワ川に挟まれた地域に位置づけられている集団（*DNP*, s.v. “Rugi”）。そこでは「ルギイ族の彼方に，ゴトネス族が，王に支配されて住む」（國原訳 1996）とされている。この「ゴトネス族」が「ゴート人」の祖先とみなされてきた（Wolfram 1990a: 47–52）。

114　Mommsen 版の Arochi を採用する。Grillone 版の Arothi は写本からは証明されない。ノルウェーの Hordaland 住民とみなされている。

115　不明。

116　英語訳のみ positura を「体躯」と解釈し,「グラニイ，アウガンジ，エウニクシ，タエテル，ルギ，アロキ，ラニイ人は，ヘルリ人と身体の高さを共有している」とする。

117　プロコピオス『戦史』6.14.11–22 はドナウ川沿いのヘルリ人の王として Roduulf（Ῥοδοῦλφος, 507−512 年）に言及している（*PLRE*, II: 946）。カッシオドルス『雑纂』4. 2（507–511 年頃の手紙）も名前を挙げずに，テオドリックが養子としたヘルリ人の王に言及する。時期的に重なっているので, この二人は同一人物かもしれない。それはそうとして，ここで言及される王はヘルリ人の王とはされていないので，ヨルダネスは事実を混同している可能性が高い。Cf. Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 232 n. 108）.

118　東ゴート王テオドリック（在位 469/472–526 年）のこと（*ODLA*, s.v. “Theoderic”; *DNP*, s.v. “Theoderich [3] Th. d. Gr.” など）。『ゲティカ』289 以降で再び登場する。

119　カッシオドルス『雑纂』9.18 においても，“beluina saevitia”（「野獣のような獰猛さで」）という表現が用いられている。

120　“quasi officina gentium aut certe uelut uagina nationum” : ヨルダネスはこの箇所で二重のメタファーを用いている（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 232 n. 111）。訳文に反映したように，ヨルダネスは「工房（officina）」「鞘（vagina）」といった単語を用いてゴート人を武具に準えている。その一方で officina には「子宮」, vagina には「膣」の意もあり，身体のメタファーともなっている（訳註 74 も参照）。

121　ヨルダネスによってのみ伝わる名前だが，プリスコス『歴史』*fr*. 13.1 はフン人の王アッティラ（在位 434–453 年）の側近としてスキュティア人貴族のベリコス（Βερίχος, Βερίχ）なる人を伝える。このベリコスについてはエッシェー＆レベディンスキー（2011: 128）参照。フン人とアッティラについては訳註 141 参照。

122　Grillone 版の読み Gothiscandia ではなく Mommsen 版の Gothiscandza を採る（訳註 35 参照）。この地名はヴィスワ川河口の都市グダニスク（Gdańsk）の語源となった可能性があるとされる（Van Nuffelen & Van Hoof 2020:

の岸辺を占拠していたウルメルギ人[123]の住む地へ前進して，陣営を築き，戦いを仕掛けて彼らをその地から追い払い，それからこの人々の近隣にいたヴァンダル人[124]をすぐに屈服させ，その勝利に付け加えた。実際，人口はその地で非常に増えていったが，ガダリクスの息子フィリメル[125]がベリグを継いで5代目の王となった直後，ゴート軍を家族と共にその地から動かすことを決断した。

27．彼〔フィリメル〕は最適な住処と適当な場所とを捜している間に，スキュティア人の，彼らの言葉ではオイウム[126]と呼ばれる土地に到達し，その地域の大いなる豊かさに魅了された。しかし軍団の半ばまでが移動したとき，川を渡るための橋が修復不可能なほどに崩壊してしまい，誰もがもはや進むことも戻ることもできなくなったと言われている。すなわちこの場所は，言われているところでは，［足元が］不安定な沼地によって囲まれた亀裂のために閉ざされているのであり，これら二つの自然の無秩序さのために近づきがたくなったのである。それにもかかわらず旅人たちの証言を通じて[127]，今日もそこでは家畜の鳴き声が聞こえ人間の痕跡が認められることを，遠くから聞き取られたにすぎないにせよ信じられる。［M28］こうしてゴート人のうち，フィリメルのもと川を渡ってオイウムの地に進んだと言われる一派は望ましい土地を得た。

28．その人々は遅れることなくすぐにスパリ族（ゲンス）[128]のところに辿り着いて，戦いを交えて勝利を手に入れ，そこから今や征服者であるかのように，ポントゥス海〔黒海〕に近いスキュティアの最果ての地方へと急いだ。このようなかたちで彼らの古い詩ではほとんど歴史であるかのように，

---

232 n. 113）。

123　タキトゥス『ゲルマニア』43に言及される「ルギ人（Rugi）」の一派とみなされている。訳註113も参照。

124　おそらくドナウ川中流域を起源とする集団。後2世紀までにローマ人によってその存在が認知されていたが（例えばタキトゥス『ゲルマニア』2），4世紀までの実態は不明瞭である。5世紀初めにアラン人・スエビ人と共にライン川を越えて帝国内に移動し，430年代には北アフリカに独自の国家を建てた（*DNP*, s.v. “Vandali”; *OCD*, s.v. “Vandals”; *ODLA*, s.v. “Vandals”）。その王ガイセリック（在位428以前–477年）とユスティニアヌスによるヴァンダル王国打倒についてはヨルダネスも『ゲティカ』167–172で述べている。

125　ガダリクスとフィリメルはともに『ゲティカ』121にて再度言及されるが，他に典拠なく不明（cf. Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 233 n.116）。

126　この地名については他に典拠がなく不明。Green（1999: 14）は古ゲルマン語で「島」や「湿原」を意味した言葉と同一視している。Merrills（2005: 119–121）はこの地名がヨルダネスあるいはカッシオドルスによる造語である可能性を認めつつ，ゴート人の口頭伝承にその起源を求めている。なおMommsen（1882: 163）は，ヨルダネスの述べる「オイウム」は現ウクライナ北西部のヴォルィーニ地方にあたるというMullenhoffの説を紹介している。

127　attestatione: Mommsen版は対格attestationemとして，「それにもかかわらず今日もそこでは家畜の鳴き声が聞こえ人間の痕跡が認められるという，旅人たちの証言を，遠くから聞き取られたにすぎないにせよ信じられる」と読む。

128　プリニウス『博物誌』6.7はスキュティアに住む「スパレイ人（Spalei）」なる集団に言及する。

誰によっても想起されるものとなっている。そのことはゴート人についての優れた著作家であるアブラウィウスも，非常に信頼できる歴史書によって証言している[129]。［M29］何人かの先人たちも彼の意見に同意している。29．加えて年代記を極めて公正に語ったヨセフスは，どの箇所においても真実の原則に従って出来事の起源をその初めから紐解いているにもかかわらず，ゴート人について私たちが述べてきたこの起源譚をどうして無視したのかは，私たちのあずかり知らぬところである。彼〔ヨセフス〕はこの時点からようやくその人々の後裔について述べ[130]，この人々は民族（ナティオ）によっても名前によっても「スキュタエ」と呼ばれると主張する[131]。この地方の境界について，何か他の事柄を半ばまで[132]語り進める前に，その様相の通りに述べる必要がある。

V．30．すなわち，スキュティアはイステル川[133]が発するところや，また［そこまで］モルシアヌスの湖[134]が広がるところでゲルマニアの地に接しており，［スキュティアは］テュラス川，ダ

129　歴史家アブラウィウスについては Van Hoof & Van Nuffelen（2020: 137–145）。おそらく 5 世紀後半から 6 世紀前半の歴史家で，その著作はギリシア語で書かれていたかもしれない。著作自体は現存せず，ヨルダネスによる引用によってのみ伝わる。

130　“sed tantum ab hoc loco eorum stirpem commemorans”：Mommsen 版は “sed tantu Magog eorum stirpe comemorans”（「その人々の後裔からはマゴグにのみ言及し」）と読む。しかしこれは写本にあらわれる読みではなく，ヨセフス『ユダヤ古代誌』1.6.1 (1.123) やイシドルス『ゴート人, ヴァンダル人, スエビ人の歴史』1 など, スキュティア人を旧約聖書の「マゴグ」の系譜に結びつける伝承を参照して Mommsen が復元した読みである。Grillone はクラス I の読みを採用しており，Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 234）もこちらに従っている。ゴート人の起源を旧約聖書の人々に求める伝承の創出については Christensen（2002: 43–53）参照。

131　ヨセフス『ユダヤ古代誌』1.6.1 (1.123);『ユダヤ戦記』7.7.4 (7.244). フラウィウス・ヨセフスは後 1 世紀の歴史家でユダヤ人，ギリシア語で『ユダヤ戦記』や『ユダヤ古代誌』などを著した（*OCD*, s.v. “Josephus (Flavius Iosephus)”）。

132　“ad medium”：この言葉遣いには解釈の余地がある。訳文では直訳したが（ドイツ語訳 “in die Mitte”，イタリア語訳 “in mezzo”），「本格的に」の含意があるかもしれない（英語訳 “to the fore”）。なおフランス語訳はこの文節全体で “avant de fournir toute autre information” と訳す。

133　Ister：写本は L（クラス I）の読み iste を除いて一致しており，Grillone 版の Hister は写本に現れない。ここでのイステル川は現在のドナウ川。訳註 239 も参照。

134　“stagnus dilatur Morsianus”：クラス I, III に現れる読み（Mommsen 版）。Grillone 版の読み “stagnum ... Mursianum” は写本に基づかない（写本 Y のみ “staguum ... mursianus” を伝える）。ただし『ゲティカ』35 ではおそらく同じ湖を指す名称として Mursian- の読みが伝わる（Mommsen 版・Grillone 版）。またこの湖については他に典拠なく不明。

ナステル川[135], ウァゴソラ川[136], そしてかのダナペルの大河[137], タウルス山まで ― アシアのではなく，スキュティアに固有のそれである ―，メオティス海の周囲全体に沿って伸びていて[138]，さらにメオティス海を越えボスフォルス海峡[139]を通ってコーカサス山とアラクセス川[140]に至り, それから左側に向きを変えて, カスピ海の後背地にまで広がっている。この海はアシアの最果ての境, 北東の大洋から発して，キノコに似たかたちで最初は細く，その後は非常に幅広く丸い形になって, フン人[141], アルバニ人[142], そしてセレス人[143]に向かって下りながら離れていく。31．私が故郷と呼ぶここ，すなわちスキュティアは，遠くまで延び広く開けていて，東にはセレス人がまさにその始点であるカスピ海の岸辺に住んでいて，西にはゲルマン人とウィストゥラ川，おおぐま座［の方角］すなわち北では大洋に，南ではペルシア，アルバニア[144]，ヒベリア[145]，ポントゥス，そしてイステル川[146]の下流に囲まれていて，その河口から水源までがドナウ川と呼ばれている。
32．他方でポントゥス海の沿岸に隣接している側は，有名な町々に囲まれている。［すなわち］

135　テュラス（Tyras）とダナステル（Danaster）はそれぞれ, 現在のドニステル（ドニエストル）川のギリシア語・ラテン語名。

136　他に典拠なく不明。

137　現在のドニプロ（ドニエプル）川。この川はボリュステネスとも呼ばれた。

138　メオティス海（マエオティス海）はアゾフ海のこと。Meotis：写本は一致してこの読みを伝えており, Grillone 版の読み Maeotis は写本に根拠がない。以下の訳文における「メオティス海」の読みについても同様。
“per omnem Maeotidis ambitum”：Mommsen 版は “per omnem Meotidis aditum”（「メオティス海の入口全体を通って」）と読む。

139　キンメリアのボスポロス海峡，すなわち現在のケルチ海峡。

140　現在のアルメニアを流れるアラス川。

141　4 世紀にアジア内陸部からヨーロッパに進出した集団。アラン人やゴート人集団を従え，5 世紀半ばには王アッティラのもとローマ帝国を脅かした（*DNP*, s.v. “Hunni”; *OCD*, s.v. “Huns”; *ODLA*, s.v. “Huns”, エッシェー＆レベディンスキー（2011）など）。

142　現在のアゼルバイジャン周辺に暮らしていた集団（*DNP*, s.v. “Albanoi”; *OCD*, s.v. “Albania”）。

143　「絹の人」を意味する言葉で，古典史料ではインド人と共にはるか東方の人々を指す言葉として用いられた（*DNP*, s.v. “Seres”; *OCD*, s.v. “Seres”）。

144　Cf. ストラボン『地理誌』11.4; プトレマイオス『地理学』5.11. 現在のアゼルバイジャンおよびダゲスタンに相当する地方。

145　Cf. プトレマイオス『地理学』5.10. 現在のジョージアに相当する地方。

146　Ister（Mommsen 版）：写本クラス I の読み。Grillone 版はクラス II, III に現れる Hister の読みを採っている。

ボリステニデ[147], オルビア[148], カリポダ[149], ケルソナ[150], テオドシア[151], カレオン[152], ミュルミキオン[153]そしてトラペズンタ[154]。[これらの町の]創建をスキュティアの不屈の諸民族(ナティオネス)がギリシア人に許し，自らと交易させるようにしたのであった。33．このスキュティアの中央には，アシアとエウロパを互いに隔てる場所, すなわちリフェイ山脈[155]があり, メオティス海[156]に流れ込む広大なタナイス川[157]を生み出す。この沼地の周囲は 144,000 パッススあり，8 ウルナよりも深いところはない[158]。[M33] このスキュティアには, まず［その］西にゲピド族(ゲンス)[159]が住んでいて, 大きくて有名な河川に囲まれている。すなわちティシア川[160]が北で彼らの土地を[161]通って流れ, 他方で南

147　Boristhenide（Mommsen 版，クラス I, III）: Grillone 版の読み Borysthenida は写本に現れない。

148　オルビアはボリュステネス川（現ドニプロ川）とヒュパニス川（現ブク川）の合流地点付近に位置する都市で，別名ボリュステネスとも呼ばれる。おそらくヨルダネスの言う「ボリステニデ」はこの都市を指すが，ポンポニウス・メラ『地誌』2.6 は 2 つの都市を区別している。

149　写本は callipoda ないし calipoda（クラス II 写本 OB）。Mommsen 版 Callipolida はラヴェンナの逸名著者『世界地誌』5.11 などの読みを参照している。Grillone 版は『ゲティカ』46 およびポンポニウス・メラ『地誌』2.7 の参照を指示して Callipidae と読むが，写本に根拠を持たない。

150　Cf. ストラボン『地理誌』7.4.2（ストラボンでは「ケロネソス」）。 クリミア半島南端部の都市（現セヴァストポリ近郊），ケルソネソス・タウリケの名でも知られる。

151　ストラボン『地理誌』7.4.4; ポンポニウス･メラ『地誌』2.3. クリミア半島南東部沿岸の都市（現在はフェオドシヤとも）。

152　Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 236 n. 142）によれば，おそらくクリミア半島東端の都市パンティカパイオン（現ケルチ）を指す。

153　ストラボン『地理誌』7.4.5; ポンポニウス・メラ『地誌』2.3.

154　Trapezunta : 写本には現れない読みだが，Mommsen が復元し Grillone も従っている。写本の読みは trapeiunta（HVO），trapeiunota（PAB）など。トラペズンタについてはストラボン『地理誌』7.4.3. 現トラブゾン，小アジア東北部に位置する黒海南東岸の都市。

155　Riphei : 写本は一致してこの読みを伝える（＝ Mommsen 版）。Grillone 版は Riphaei「リファエイ」と修正。

156　ポンポニウス・メラ『地誌』1.8, 2.1; オロシウス『異教徒を論駁する歴史』1.2.4–5.

157　現在のドン川。この川は古来よりエウロパとアシアの境界とみなされていた（『ゲティカ』45; *OCD,* s.v. “Tanaïs”）。

158　「ウルナ（ulna）」は水平に伸ばした両腕の長さを指す。

159　後 2 世紀から 6 世紀にかけての活動が知られる集団。3 世紀に故地を離れ南下，5 世紀にはアッティラのもとフン帝国に服属するも彼の死後離反，ダキアに定住地を得たとされる（*ODLA*, s.v. “Gepids”）。

160　ドナウ川の支流のひとつ。

161　“per aquilonem eius corumque discurrit” : Mommsen 版 chorumque の読みを採る。Mommsen によれば異読はクラス II に属する O 写本のみ（quorumque）だが，Grillone はこの異読を記載しておらず（Giunta & Grillone 1991 も同様），corumque と修正する理由と合わせて不明確である（脱字の可能性は否定できない）。

西では大いなるドナウ川そのものが，東ではフルタウシス川[162]が隔てている。［この川は］激しく渦を巻き荒れ狂いながらイステル川[163]の流れに落ちていく。
34．これらの内側がダキアであり，冠に似た［地形をなす］険しい山々[164]に囲われていて，その山々の左手，北に面して延びていく斜面の近くには沢山のウェネティ人[165]の民（ナティオ）が，ウィストゥラ川の水源から広大な空間のそこかしこに住みついている。それらの名前は今では様々な家と場所に応じて変化しているものの，主にスクラヴェニ人そしてアンテス人と呼ばれている[166]。35．スクラヴェニ人はノウィエトゥヌムの町[167]とムルシアヌスと呼ばれる湖から，ダナステル川と北方ではウィスクラ川[168]に至るまで［の地に］住んでいる。これらの人々は沼地と森林とを町の代わりに所有している。他方でその〔ウェネティ人の〕うちで最も強いアンテス人は，ポントゥス海が湾曲するあたりで，ダナステル川からダナペル川まで広がっている。それらの河川は互いに何日もの距離で離れている。
36．他方で大洋の海岸に向かっては，ウィストゥラ川の流れが 3 つの河口によって飲み干されるところに，様々な集団（ナティオネス）から集まったウィディウァリイ人が住んでいる[169]。この人々に続いて，とても平和的な人間であるアエスティ人もまた大洋の沿岸を占めている[170]。その南にはいとも勇敢なアカツィリ族（ゲンス）が住んでいて，農耕を知らず，牧畜と狩猟で生きている[171]。［M37］その人々の向こう側，ポントゥス海の上方にはブルガール人の住処が広がっているが，この人々は私たちの罪

162　Mommsen 版：Flutausis. 写本は数種の異読を伝える（flutausis (HPV), fluttausis (A), fluctausis (L), flutaus (XY) など）。Grillone 版の読み Alutus は写本に基づかない。これは Mommsen のアパラトゥスでの指摘を受けつつ，『ゲティカ』74 に言及される「アルトゥス川」（現オルト川）と同一視するため。これに対し Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 236 n. 149）は，ウクライナに発しドナウ川と合流するプルト川を指す可能性を指摘している。

163　Ister：Mommsen 版。ただし hister の異読がある（写本 BXY）。

164　カルパティア山脈を指す。

165　プトレマイオス『地理学』3.5.7–9（「ウェネダイ人」）およびタキトゥス『ゲルマニア』46。

166　ともに 6 世紀に初出の集団名（プロコピオス『戦史』7.14.2; Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 237 n. 151）。

167　ノウィエトゥヌム（ノウィオドゥヌム）は現在のルーマニア，ドナウ川下流に位置する（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 234 n. 124, 125）。

168　『ゲティカ』17, 31, 34, 36 のウィストゥラ川と同じ。訳註 72 および『ゲティカ』96 も参照。

169　『ゲティカ』96 にも言及のある集団で，それによればゲピド人の移動後に空いたウィストゥラ川河口に避難するように集まった人々であった。

170　タキトゥス『ゲルマニア』45; カッシオドルス『雑纂』5.2 に言及される集団で，琥珀の交易に携わっていたことなどが伝えられる。

171　アカツィリ人は 5 世紀の歴史家プリスコス（*ODLA*, s.v. “Priscus of Panium”）によって初めて言及される集団で，フン人に服属していたとされる（プリスコス『歴史』*fr*. 11. 2）。なおプリスコスの著作はヨルダネスの情報源のひとつである（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 83–85）。

に対する罰によって極めて有名になっている[172]。

37．そしてここから，まるでこの上なく勇敢な民族（ゲンテス）に富んだ草原からかのように，フン人が人々（ポプリ）の二重の激情を芽生えさせた。すなわち一方はアルツィアギリ人[173]，他方はサウィリ人[174]と呼ばれていて，違うのは住処だけである。ケルソナ（ここから貪欲な商人がアシアの産品を輸入している）のすぐ近くにはアルツィアギリ人が，夏には平原を放浪し，家畜の牧草が招くのに応じて移り住み，冬にはポントゥス海の上方へと去っていく。この地についてはフヌグリ人[175]も良く知られているが，それはこの人々からテン皮の品物がやってくるからである。

38．これらの人々の大胆さが恐れるのはゴート人だけであった[176]。［M38］この人々の第一の住処はメオティスの湖のすぐ近くのスキュティアの地であり，第二はミュシア[177]，トラキア，ダキア，第三はポントゥス海の上方，再びスキュティアとなったことを私たちは読んだ。この人々がブリタンニアやどこか別の島に奴隷として連れて行かれ，一頭の馬と引き換えに何者かによって買い戻されたのだという話は，他のどこにも書かれているのを見つけることはできなかった。ともかくも，その人々は私たちが述べたのとは異なるかたちで私たちの世界[178]にやって来たのである，

172　『ローマーナ』388 でも触れられている 540 年代のブルガール人の襲来を指す。この時期のバルカン半島の軍事情勢についてはマラヴァル（2005: 119–120）参照。ブルガール人はテュルク系の集団で，史料には 5 世紀後半にビザンツ帝国の同盟者として初出する（*DNP*, s.v. “Bulgaroi”; *ODLA*, s.v. “Bulgars”）。

173　詳細は不明。その同定については Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 238 n. 161）がいくつかの説を紹介している。

174　5 世紀後半にコーカサス地方中央部に暮らしていた集団（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 238 n. 159）。

175　中央アジアのテュルク系集団だったオノグリ（オノグル）人のこと（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 238 n.162; *ODLA*, s.v. “Onoghurs (Onogundurs)”）。

176　“Gothos tantum horum uirorum formidauit audacia”. ただし Grillone 版のこの読みは写本に基づくものではない。写本が一致する読み（＝ Mommsen 版）では “quos tantorum virorum formidavit audacia”「これほどの人々の大胆さは彼らを恐れた」。Mommsen 版を底本とする英語訳は formidavit を「～を恐れさせる」，quos はフヌグリ人を，“tantorum virorum” はアルツィアギリ人とサウィリ人を指すと解し，“The insolence of such kind of men inspires fear in them”（意訳：「アルツィアギリ人とサウィリ人はフヌグリ人を恐怖せしめた」）と訳す。フランス語訳は Giunta & Grillone（1991）の底本に従いつつも，formidauit を英語訳と同様に理解する（“Il n’y a eu que l’audace de tels hommes pour effrayer les Goths.”「ゴート人を恐怖せしめるのはこれらの人々の大胆さのみであった」）。

177　この箇所は文脈としては「モエシア」が相応しいが，Mommsen 版の読み Mysia を採る。写本は Mysiam（写本 HPV，クラス I），maesia（B，クラス II）などの綴りを伝え，Grillone 版（および Giunta & Grillone 1991）の Moesia は写本に基づかない修正である。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 239 n. 166, 248 n. 230）によれば，ヨルダネスは（小アジアの）ミュシアとモエシアを同一視していた可能性がある（cf. Grillone 2017: 316 n. 268）。

178　“nostro orbe” : Mommsen 版では “nostro urbe”（「私たちの都市」）。Grillone 版は写本の 3 クラスを通じて見られることと文法上の理由（urbis は女性名詞だが nostro は男性形）からこちらの読みを採る（Grillone 2017: 302–303 n. 191）。一方 Mommsen 版の読みを採る英語訳に従うならば，この一文は「その人々は私たちが述べた

と誰かが述べるならば，その人は私たちに難癖をつけている［ことになる］。なぜなら私たちは老婆の物語[179]に同意するよりも読んだ事柄を信じるからである。

39．さて，私たちの主題に戻るならば，話題となっている先述の人々はメオティス[180]のすぐ近くのスキュティアの第一の住処に留まっていたころ，フィリメルを王に戴いたことが知られている。第二［の住処］であるダキアとトラキア，ミュシア[181]の地ではザルモクセスが［王であって］，驚くべき哲学の学識の持ち主であったことを数多くの年代記作家が証言している[182]。すなわちかつては学識あるゼウタがおり[183]，そして次にディキネウス[184]が，三番目に前述のザルモクセスがいた。その人々に知恵を教える人物もいないわけではなかったのだ。40．それゆえにゴート人はほとんど全ての蛮族よりも常に分別のある人々となっていて，ギリシア人に匹敵するほどであった。そのことはギリシア人のやり方でその人々〔ゴート人〕の歴史と年代記とを書いたディオが述べるとおりである[185]。彼が述べるところでは，その人々のなかで高貴な生まれの人々は最初「タラボステセイ」，のちに「ピレアティ」[186]と呼び習わされていた[187]。この人々から人々〔ゴート人〕の王と祭司が任ぜられていた。

41．ところでゲタエ人[188]は，詩人の作り話が戦の神と呼んだマルスははるか昔，その人々〔ゲタ

のとは異なるかたちでやって来たのだと，私たちの都市〔すなわちコンスタンティノープル〕にいる誰かが述べているならば」と訳しうる。

179　“fabulis anilibus”:「論ずるに値しない小話」を意味する慣用句（類例はキケロ『神々の本性について』3.12，クインティリアヌス『弁論家の教育』1.8.19）。「老女の（anilis）」という言葉の利用はラテン文学における「老女」，さらには女性に対する否定的イメージを反映している。Rosivach（1994: 113）参照。

180　Meotis：Mommsen 版の読み。Grillone 版は “Maeotidem paludem”（「マエオティスの湖」）と読むが，maeotidem の読みは写本に基づかない（訳註 138 参照）一方，paludem は写本 A および X, Y, Z に現れる。

181　Mysia：Mommsen 版の読みを採る。Grillone 版の読み Moesia は写本 A の読み moesiaeque を参照したものか。

182　「サルモクシス」とも。この人物についてはヘロドトス『歴史』4.94–96 がゲタエ人の信仰に関連して言及している。ヘロドトスによればサルモクシスは哲学者ピュタゴラスの弟子であり，故郷に帰ってからは不死の教えを説いたという。またストラボン『地理誌』7.3.5 もゲタエ人の祭司となった「ザモルクシス（ザルモクシス）」について伝える。

183　他に伝承なく不明。

184　Dicineus：Mommsen 版。Grillone 版の読み Deceneus は写本に無く，ストラボン『地理誌』7.3.5, 16.2.39 に従っている。ディキネウス（デケネウス）は『ゲティカ』67–72 で詳しく紹介される人物で，前 1 世紀ごろのゴート人を事実上統治していたとされる。彼はゴート人に学問と宗教を教え，祭司身分を創出したという。

185　ディオ（ン）については『ゲティカ』14 参照。ここでの引用はディオン・クリュソストモスに拠ると考えられている（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 72–74）。

186　『ゲティカ』71 も参照。

187　vocitatos：Mommsen 版では vocatos（「呼ばれていた」）。

188　Mommsen 版は Gaetae（写本 H のみ）。史料上ヘロドトス『歴史』4.93–96 に初めて言及されるゲタエ（ゲ

エ人〕のもとで生まれたのだと歌われるほどに称えられていた。それゆえにウェルギリウス［は歌った］,「ゲタエ人の畑地を治める父神グラディーウスとともに」[189]。［M41］ゴート人はこのマルスを極めて残忍な崇拝によって常に宥めたのだが（というのも彼への生贄は捕虜の死[190]だった），戦争を司る者は人間の流血によって宥めるのが適切であろうと考えていたのである。彼に最初の戦利品が捧げられ，彼のために死体が木に吊るされ[191]，そしてその他よりも［マルスへの］礼拝への熱意がこの人々に浸透していった。なぜなら［この］神的なものに対する献身は父に向けられているかのように見えたからである。

42．しかしながらポントゥス海の上方の第三の住処では，この人々はもはやもっと人間的に，また上述のようにより賢明になっていて，民（ポプリ）は［二つの］家に従って分かれていた。ウェセゴタエ〔西ゴート人〕はバルト家に，オストロゴタエ〔東ゴート人〕は高名なアマル家に仕えていた[192]。

43．この人々の熱意は，詩人である以上に歴史家であったルカヌスが「アルメニアの弓にゲタエ人の弦を張って」と証言しているように[193]，弓に弦を張ることにかけては近隣の他の民族（ゲンテス）のなか

タイ）人は，4 世紀以降の史料においてゴート人と同一視される（Coumert 2007: 40–41; Ford 2020; Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 50–51）。

189　『アエネーイス』3.35。訳文は岡・高橋訳（2001）より拝借した。

190　“mortes ... captorum”：「捕虜の死体」とも訳しうる。

191　“huic truncis suspendebantur exuuiae”：exuviae は古典期には武装品を指したが，のちに死体を意味するようになった。プロコピオス『戦史』6.15.25 はこの慣行をトゥレ島（『ゲティカ』8 および訳註 33 参照）の住民に帰している（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 240 n. 175）。

192　ウェセゴタエはいわゆる「ヴィジゴート（西ゴート）」, オストロゴタエは「オストロゴート（東ゴート）」を指すが，ヨルダネスが記すこれら二集団の起源譚は時代錯誤である。それぞれヴィジゴートとオストロゴートと呼ばれる集団の出現は 378 年のアドリアノープルの戦い以降のことであり，それをバルト家・アマル家の系譜と共に 4 世紀以前にまで遡らせるのはテオドリック治世の産物と考えられている（足立 1999; Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 57–64）。バルト家とアマル家の系譜と起源譚についても同様である。二つはともに『ゲティカ』において古くからゴート人を支配してきたとされる家系で，とりわけアマル家の事績は『ゲティカ』の叙述の中心をなすほどにヨルダネスによって重視されている。アマル家はテオドリック（訳註 118 参照）が属した家系であり，カッシオドルス『雑纂』9.25.4 によればアタラリック王（在位 526–534 年，テオドリックの孫）より 17 代前にまで遡り，同 11.1.19 は 9 人の王に言及する。また『ゲティカ』79–81 はマタスエンタ（「まえがき」註 6 参照）に至るアマル家の系譜を語っている。Wolfram（1990a: 47–49）はそれらがカッシオドルスによって初めて書き記されたアマル家の伝承であったとし，そこに代々保存されてきたゴート人のアイデンティティの核の一つを見出した（Wolfram の学説については「まえがき」参照）。それに対し Heather（1989; 1991: 3–33）は，史実においてアマル家がゴート人の指導的地位を確立するのは 5 世紀半ばのことにすぎず，それを 4 世紀以前にまで遡らせるのはテオドリック時代の王朝プロパガンダの産物と論じた（cf. 佐藤 2002）。とはいえ, カッシオドルスやヨルダネスによる歴史認識やその政治的意味合いがそれ自体として探究されるべき問題であることは確かである。

193　ルカヌス『内乱』8.240–241. ルカヌスは後 1 世紀のラテン詩人,『内乱（ファルサリア）』が有名（*DNP*, s.v.

でも随一であった[194]。さらにそれらの人々の前では[195], 人々は先人の事績を歌にして旋律とキタラにのせて歌った。エテルパマラ, ハナラ[196], フリディゲルヌス[197], ウィディゴイア[198] そしてそのほか，この民族（ゲンス）で卓越した評判を取った人々の事績を。そのような英雄がいたことを，驚くべき古代はほとんど自慢しないのだ[199]。

44. 伝えられるところでは当時, ウェソシス[200]がむしろ彼自身にとって悲しむべき戦争をスキュティア人，すなわち，アマゾネス人の男であったと古い権威が伝える人々に対して引き起こした。この人々〔アマゾネス人〕についてはオロシウスが最初の巻で，女兵士たちであったと声を大にして[201]明言している[202]。このことから, 彼〔ウェソシス〕はその時明らかにゴート人と戦ったのだと私たちは判断している。なぜならその彼がアマゾネス人の男たちと確かに戦ったことを私たちは知っているから。この人々は，近隣の人々がダナペルと呼んでいるボリュステネス川からタナイス川の流れに至るまでの，メオティスの湖の湾曲部のほとりに住んでいた[203]。

45. ところでこのタナイス川について，私は次のように述べよう。［この川は］リフェイ山脈から発してあまりに速く流れ落ちるので，メオティスにせよボスフォルスにせよ，その近隣の

“Lucanus [1] M. Annaeus L.”; *OCD*, s.v. “Annaeus Lucanus, Marcus”）。訳文は大西訳（2012）から,「ゲタエ族」を「ゲタエ人」に変更して拝借した。ポンペイユス・マグヌス（大ポンペイユス）がその同盟者であったデイオタルス王にパルティア人の協力を要請するよう命ずる一連の発言の一部。

194　“Quorum studium fuit primum, inter alias gentes uicinas, arcum intendere neruis ...”. 英語訳は本文で “They were the first, among other neighbouring peoples, to string the bow with tendons,...”（「この人々は近隣の他の民族のなかでも，弓に弦を張ることにかけては随一であった」）と訳しつつ，註（241 n. 178）で “Their first desire, when among other, neighbouring nations, was to string the bow with tendons” という別の訳し方も示している。

195　“ante quos”：写本が一致して伝える読み（＝ Mommsen 版）。Mommsen がアパラトゥスで提案し Grillone 版が採用する antiquitus をとれば「古代より，人々は先人の…」となる。

196　エテルパマラとハナラについては他に典拠なく不明。

197　Fridigernus：Mommsen 版。Grillone 版 Fritigernus は写本に現れないが，この人物は『ゲティカ』134 以下で語られる「フリティ（ディ）ゲルヌス」を指す可能性があり，それらの箇所では Fritigern-（クラス I, III）と Fridigern-（クラス II）の読みが伝わる。

198　『ゲティカ』178 も参照。

199　「驚くべき古代」をいわゆる古典古代と解すならば，ゴート人の古の英雄はギリシア・ローマ古代の英雄たちに決して引けを取らない，という意味か（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 241 n. 184）。

200　古代エジプトの伝説的な王セソストリス（*DNP*, s.v. “Sesostris”）のこと。ヘロドトス『歴史』2.102–110 でその偉業が語られる。「ウェソシス」とスキュティア人の戦争に関するヨルダネスの典拠は，ユスティヌス『ピリッポス史』1.1 および 2.3；オロシウス『異教徒を論駁する歴史』1.14。

201　“professa voce”：字義どおりには「公に声を挙げて」。

202　オロシウス『異教徒を論駁する歴史』1.15.3.

203　ポンポニウス・メラ『地誌』1.105；オロシウス『異教徒を論駁する歴史』1.2.50.

河川が凍結するときも全て［の河川］で[204]唯一，険しい山々によって温められて[205]，スキュティアの寒気によって凍ることは決してないほどである[206]。そこ〔タナイス川〕はアシアとエウロパの境界として有名であるが[207]，それ〔タナイス川〕はもう一本あって，［こちらは］クリンニ山脈に発してカスピ海に流れ去る[208]。46．またダナペル川は大きな沼に端を発し，あたかも母体からのように流れ出る[209]。この川は中流に至るまでは甘く飲み水に適しており，非常に美味な魚を産むが骨がなく，体内にあるのは軟骨だけである。しかしポントゥス海により近くなると，エクサンフェウス[210]なる名前の小さな泉を受け入れて［水が］非常に苦くなるので，40 日間は航行できるとはいえこの僅かな水によって変化して汚れ，似ても似つかぬものとなり，ギリシア人の町であるカリピダエ[211]とヒュパニス川の間で海に流れ込む。この河口の向かいに島があり，アキリスと呼ばれている[212]。これら〔タナイス川とダナペル川〕の間に極めて広大な陸地があり，木々が生い茂り，沼地のせいで［足元が］危ない[213]。

VI．47．こうして，そこにゴート人が留まっていたとき，エジプト人の王であるウェソシスが戦いを仕掛けてきた。当時彼ら〔ゴート人〕の王はタナウシス[214]であった。ファシス川

204　omnium：Mommsen 版は amnium（「河川のなかで」）。

205　河川が起伏の激しい険しい岩肌を流れ落ちるあいだに温めるということか。

206　ポンポニウス・メラ『地誌』1.115.

207　オロシウス『異教徒を論駁する歴史』1.2.4. 訳註 157 も参照。

208　現在のヴォルガ川。古代には現在のドン川とヴォルガ川の両方がタナイス川と呼ばれていた（ストラボン『地理誌』11.7.4）。

209　ポンポニウス・メラ『地誌』2.7.

210　Exampheus：写本は一致してこの読みを伝える（＝ Mommsen 版）一方，Grillone は Examphaeus と読む。

211　Callipidae：写本は一致してこの読みを伝える（=Mommsen 版・Grillone 版）。おそらく『ゲティカ』32 に言及される「カリポダ」（カリポリス）を指している。

212　黒海北岸ではオルビアを中心としてアキレウス崇拝が盛んであった（*OCD*, s.v. “Achilles”）。ストラボン『地理誌』7. 3. 19 はボリュステネス川・ヒュパニス川河口付近にあった「アキレウスの走路」と呼ばれる神域について伝え，それは現在のテンドリフ砂州（ウクライナ，ヘルソン州）にあたる。

213　本節の内容はポンポニウス・メラ『地誌』2.5–7, 2.98 およびソリヌス『驚異譚集成』15.1 に依拠している。なおポンポニウス・メラ『地誌』2.6–7 における地誌描写はヘロドトス『歴史』4.52–53 にまで遡る。

214　ゴート人の王タナウシス（Thanausis）は，『ゲティカ』にしか現れない。本節の典拠と思しきユスティヌスの記述では，ウェソシスと戦ったのは（ゴート人の王タナウシスではなく）スキュティアの王タナオスである（ユスティヌス『ピリッポス史』1.1）。Christensen（2002: 236–239）も参照。

（そこからキジ[215]が生まれ，世界中の有力者たちの宴会で豊富に見られる[216]）での戦闘のさなか，ゴート人の王たるタナウシスはエジプト人の［王］ウェソシスと激突し，彼をひどく打ち負かし，エジプトに至るまで追跡した。そしてもし，渡渉を拒むナイル川の水や，あるいはウェソシスがかつてエチオピア人の侵攻に備えて自ら建設を命じていた要塞に阻まれることがなければ，彼〔タナウシス〕は彼をその祖国において殺害したであろう。しかし，そこに布陣した彼を傷つけるまでには至らなかったので，彼〔タナウシス〕は引き返しながらアシアのほぼすべてを服従させた[217]。そして彼の親友であったメデス人の王ソルヌスに貢納させるために，［アシアをソルヌスに］服属させた[218]。

48．当時，彼の軍隊の勝利者のなかには，征服されたそれらの属州[219]が遍く豊かで富裕であるのを見て，自らの部隊を離れ勝手にアシアの一部に留まるものもいた。［M48］ポンペイウス・トログスは，彼らの名前ないし出自からパルティア人の血統が興ったと述べている。それゆえ今日でも彼らは，スキュティアの言葉で「逃亡者」を指す「パルティ」と呼ばれているのだ[220]。自らの出自を反映して，彼らはアシアの全民族（ナティオネス）のなかでほぼ唯一の射手であり，非常に勇敢な戦士である。その名前について私たちは彼らを「パルティ」，すなわち「逃亡者」と言ったが，次のような語源を持ち出す者もいる。すなわち「パルティ」と彼らが言われるのは，彼らが自分たちの祖先〔パレンテス〕から逃れたからだ，と[221]。さてゴート人の王タナウシスであるが，彼は亡く

215　キジ科の鳥（Phasides）については，さしあたりゾイナー（1983: 524–525）にいくつかの典拠が紹介されている。その他，例えば4世紀のヒエロニュムス『書簡集』54.12が富の象徴のひとつとしてキジに触れている。

216　ファシス川は，現在のリオニ川（ジョージア）に相当する。

217　ユスティヌス『ピリッポス史』2.3（ただし戦闘の場所は明示されていない）；オロシウス『異教徒を反駁する歴史』1.14（ほぼユスティヌスに拠っている）。

218　この一文はMommsen版の読みを採用した（“et sibi tunc caro amico Sorno, regi Medorum, ad persolvendum tributum subditos fecit”）。Grillone版では“et sibi tunc carum amicum Sornum, regem Medorum, ad persoluendum tributum subditum fecit”（「そして彼の親友であったメディア人の王ソルヌスを，貢納させるために服属させた」）と読むが，この読みはクラスIIの一写本（B）にしか現れず，またこれを採用したGrilloneの説明（n. 228）も説得的とは言えない。ソルヌス（Sornus）という名のメディア王は，他の文献には確認されない。

219　「属州（provincia）」：ヨルダネスは6世紀のローマ帝国圏のみならず，かつてローマ帝国属州であった場所についてもこの言葉を用いることがあり，さしあたり「属州」とした（Mommsen 1882: 196; Grillone 2017: 312 n. 243; cf. Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 158 n. 324）。『ゲティカ』51, 59, 76, 96, 107, 153, 173, 225, 226, 233，および『ローマーナ』の用例も参照。

220　ヨルダネスは『ゲティカ』48, 61でポンペイウス・トログスの名前を挙げているが，彼のテクストそのものではなく，ユスティヌスによる要約を用いていると推測される（Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 77）。ここでの「逃亡者（fugaces）」という表現は，典拠と思しきユスティヌス『ピリッポス史』41.1では「亡命者（exules）」。パルティア人がスキュティアから興ったことについては，ユスティヌス『ピリッポス史』2.1でも言及される。

221　同時代におけるその他の語源説明として，ステファノス『エトニカ』IV: 28–29および，Van Nuffelen &

なると人々の間で神々の一人として崇められるようになった。

VII. 49. 彼の死後，彼の軍隊が彼の後継者[222]のもと他の地域に遠征していたとき，ゴート人の女性たちが，とある近隣の民（ゲンス）によって連れ去られそうになった。夫たちから教えを受けていた彼女たちは果敢に抵抗し，彼女らに向かってやって来た敵たちに大きな屈辱を与えて追い払った。勝利を収めた彼女たちは，いっそう勇敢で大胆になり，互いを励ましつつ武器を取り，そして二人のとても勇敢な者，ランペトとマルペシア[223]を選び出し，首長として付き従った。
50. 自らの財産を防衛すると同時に他人のものを破壊するために意を用いていた彼女たちは，くじを引いた。ランペトは本土の境域を守るため留まり，一方でマルペシアは女性たちの部隊を編成して，この新式の軍隊をアシアへと連れて行き，数多の民族（ゲンテス）を戦争によって屈服させ，別の民（ゲンテス）を和約によって懐柔しながら，コーカサスまでたどり着いた[224]。そこに幾許か留まって，彼女はその場所に「マルペシアの岩」という名を与えた。これについてはウェルギリウスも［次のように述べている］。「まるで固い火打ち石か，マルペシアの岩が立っているかのよう[225]」。その場所は，後にアレクサンドロス大王[226]が「カスピア門」と名付けた門を建設したところであり（そこは現在ラジ族（ゲンス）が，ローマ人の砦となるべく守っている）[227]，［M51］それゆえアマゾネス人はしばらくそこに留まり，英気を養ったのである。
51. そこから出発した彼女たちは，ガルガラ[228]の町近くを流れるアレス川[229]を渡り，アルメニア

Van Hoof（2020: 243 n. 199）も参照。

222　「後継者（successore）」：クラス III の半分強がこの綴り。クラス I（および Mommsen 版）は揃って「後継者たち（successores）」（複数形）。

223　アマゾネスの首長としてのランペトとマルペシアの名は，ユスティヌス『ピリッポス史』2.4 が初出である。

224　オロシウス『異教徒を反駁する歴史』1.15，およびユスティヌス『ピリッポス史』2.4 を参照。

225　ウェルギリウス『アエネーイス』6.471. 訳文は岡・高橋訳を参照しつつ一部改変した。なお，ウェルギリウスがこの句で参照しているのは，ヨルダネスの言う「マルペシアの岩」ではなく，パロス島のマルペッソス山とされる（*DNP*, s.v. “Paros”）。

226　アレクサンドロス大王（在位紀元前 336–323 年：*DNP*, s.v. “Alexandros [4] A. »der Große«”）は，『ゲティカ』57, 65–66, 116 にも登場する。

227　「カスピア門（Pylae Caspiae）」は，アルボルズ山脈に沿ってカスピ海南岸を東西に伸びる路に同定されることもあるが，プリニウス『博物誌』6.9 やプロコピオス『戦史』1.10.4 などがそうであるように，より西方，コーカサス山脈のダリエル渓谷に位置づけられる場合が多い。『ゲティカ』51, 55 も参照。黒海東岸のコルキスに住むラジ族は，長らくペルシア側についていたが，ヨルダネスが執筆している頃にはローマと同盟関係にあったとされる（プロコピオス『戦史』2.15）。

228　Grillone 版の gangra ではなく，写本群および Mommsen 版に従って gargara と読む。この町は，一般にパフラゴニアのガングラ（現在のチャンクル）に比定される。

229　Grillone 版の Halys ではなく，写本群および Mommsen 版に従って ales と読む。この川は，一般にガン

とシリア，キリキア，ガラティア，ピシディアそしてアシア全土をも同様の幸運によって服従させた。彼女たちはイオニアとアイオリア[230]へと転進し，降伏したその属州[231]を自分たちのものとし，そこを長い間支配し，さらには彼女らの名をもつ町や城塞をそこに捧げた。エフェソスでは，彼女たちは自らが耽っていた技芸である弓術や狩りに対する熱意ゆえに，贅の限りを尽くした驚くべき美しさをもつディアナ神殿を建築した[232]。52．このようにしてこのスキュティア出身の女性たちは，運良くアシアの支配を100年近く保ち[233]，それからようやく故郷である上述のマルペシアの岩，すなわちコーカサス山脈へと戻った。この山脈については二度目の言及なので，その広がりと位置を述べることが不適切だとは思われない。というのも，そこは連綿と続く尾根によって地上の大半を囲うことが知られているのである[234]。
53．すなわちそれはインド洋に始まり，その南に面するところは太陽によって熱せられ燃えている。北側に伸びるところは凍える風と霜に晒されている[235]。それからシリアへと弧を描いて曲がり込み，数多の川を生み出しているのだが，とりわけアシアの地域では，多くの意見では航行できるというユーフラテスとティグリスを，途切れることない源泉の莫大さでもって送り出している[236]。それらはシリア人たちの地を囲むことで，そこが「メソポタミア」〔川のあいだの意〕と

グラ近郊を流れるハリュス川（現在のクズルウルマク川）に比定される。前註のガングラの事例を含め，Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 245 n. 207）は，実際の地理的配置を根拠に，ここで述べられる内容が（ストラボン『地理誌』11.5.1–2の述べる）カスピ海西岸のメルマダリス川流域に住むガルガレイス人や，（プトレマイオス『地理学』5.11.2, 8.19.7が述べる）同じくカスピ海西岸の町ガンガラと結びつくのではないかと推測している。

230　写本群は一致してEoliaの読みを伝える。

231　『ゲティカ』48の訳註219を参照。

232　ポンポニウス・メラ『地誌』1.88。Cf. ユスティヌス『ピリッポス史』2.4; オロシウス『異教徒を反駁する歴史』1.15.5; ストラボン『地理誌』11.5.4. 同時代におけるヨルダネスとは異なる見解として，プロコピオス『戦史』8.3.5–11.

233　オロシウス『異教徒を反駁する歴史』1.16.1.

234　Cf. オロシウス『異教徒を反駁する歴史』1.2.36.

235　ソリヌス『驚異譚集成』38.10, 13.

236　ここで述べられる「アシアの（Asianensem）」（地域）については，写本間で綴りの対立がみられる。Mommsen版はクラスIの写本群が揃って伝えるVasianensemを採用する一方，Grillone版はクラスIIIの写本群が伝えるAsianensemを採る。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 246）の英語訳では，本文ではMommsen版のラテン語を主格に直したVasianensesと書く一方で，註215においては，ヨルダネス自身が別の所でコーカサス全体がアシアに属すると述べているのだから，ここでユーフラテスとティグリス川の源泉をわざわざアシアと特定するのは不自然であるとして，クラスIIIのAsianensemの読みを採るGrilloneの解釈を批判する。しかし他方でVan Nuffelenらは，自分たちの採用するVasianensemの示すところについては沈黙し（おそらくは綴りの乱れと考えて），ヨルダネスがここで書きたかったのはAdiabenensis，すなわちメソポタミア北部のアディアベネAdiabeneではなかったかと推測している（ただしアディアベネの形容詞形は本来Adiabenusであると註記している）。

呼ばれ，またその通りであるように形作っており，紅い海の湾[237]にそれらの流れが注いでいる。
54．ついで前述した尾根は，再び北の方に曲がって，スキュティアの地を大きく湾曲しながら横たわり，そしてそこから非常に有名な河川，すなわちアラクセス川，キュスス川，カンビセス川をカスピ海に送り込む[238]。さらにその連綿と続く尾根はリフェイ山脈にまで伸びている。それはスキュティアの民（ゲンテス）に対して，その背中によって境界を提供し，ポントゥスまで下り，いくつかの丘を経てヒステル[239]の流れと接触する。その川によってそれ〔山脈〕は隔てられており，スキュティアにある部分はタウルスとも呼ばれている[240]。
55．これほどの規模であり，またその突出した山頂部が持ち上がることで全山脈のなかでほぼ最高峰であるそれ〔コーカサス山脈〕は，自然の構築によって諸民族（ゲンテス）に難攻不落の要害をもたらしている。というのも，そこかしこに切れ目で尾根が分断され谷の裂け目が開いていて，カスピア門とか，アルメニア門，キリキア門，あるいは同様に地名に準えた門を形作っているのだが，高壁が両側に分かたれていて荷車をほとんど通れなくしているのである。それ〔コーカサス〕は多様な民族（ゲンテス）によって様々に呼ばれている。インド人はそれを一方ではランムス[241]，他方ではプロパ

しかしながら，Van Nuffelen らが提案するアディアベネは，ティグリス川の上流域にあるとはいえ，ティグリスとユーフラテス両河川の源流域としては不適切である。改めてクラス I 写本群の綴りである Vasianensem に着目するならば，この単語は Phasianensem の異綴り，すなわちファシアネ（Φασιανῶν χῶρα/Φασιανή：おおよそアナトリア東部地域，ユーフラテス源流域）の形容詞形と解釈すると，うまく文意に当てはまるように思われる。Phasianensis の用例は十分に調査できていないが，俗ラテン語において /f/ の音価を表す v と ph の交替はしばしば確認されるところであり，元の綴りと地理の双方に鑑みて無理のない推測であると考えられる。この解釈は，実のところすでに Westberg（1904: 17–18）が述べていたが，その後顧みられなかったようである。

とはいえ Westberg も，綴りの提案以上の考察を行っているわけではない。付言しておくならば，仮に Phasianensem の綴りが正しいとすると，ティグリスとユーフラテスに関するヨルダネスの説明はギリシア語の著作に拠る可能性がある。「ファシアノイの地（ファシアネ）」という地名はもっぱらギリシア語の作品に現れる語である一方，例えば Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 246 n. 215）が典拠として挙げるラテン語著作のソリヌス『驚異譚集成』37.5 やポンポニウス・メラ『地誌』3.77 には，両河川の源泉を示す具体的な場所は書かれていないからである。あるいはヨルダネス自身（ないしカッシオドルス）による表現の可能性も残される。いずれにせよ，Vasianensem が Phasianensem の異綴りであるとするならば，この綴りを伝えるクラス I 写本群が，他のクラスに比べて祖型に近い可能性が高まるのではないだろうか。

237　ここでは紅海ではなく，ペルシア湾を指している。ストラボン『地理誌』11.12.3, 11.14.2 を参照。

238　それぞれ現在のアラス川，クラ川，イオリ川を指す。ポンポニウス・メラ『地誌』3.40–41 を参照。

239　「ヒステル（Hister）」：ヒステル（イステル）川は一般にドナウ川を指す（cf.『ゲティカ』30, 31, 33, 75, 114）が，この箇所は文脈としてはドニプロ川が相応しいと考えられる（Grillone 2017: 44 n. 252）。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 246 n. 218）は「ここはタナイス川（ドン川）のこと」と述べるが，『ゲティカ』30 の記述などと見比べても不正確である。

240　Cf. ポンポニウス・メラ『地誌』1.109.

241　「ランムス（Lammus）」：Grillone 版はソリヌス『驚異譚集成』38.12 の写本表記に基づいて「ヤンムス

ニスス[242]と呼び習わし，パルティア人は当初カストラと，後にはニファテスと宣言した。シリア人とアルメニア人はタウルスと，スキュティア人はカウカスス〔コーカサス〕やリフェウスとし，その末端ではタウルスと名付けた。他の民族（ゲンテス）もこの尾根に他の様々な名前を与えている[243]。さて，私たちはその連なりについて少しばかり触れたので，余談の起点となったアマゾネス人に戻ろう[244]。

VIII．56．自分たちの子孫が減ることを恐れた彼女たちは，近隣の民（ゲンテス）に衾の相手を求め，年に一度祭日を設け，次の時期〔翌年〕に同じ場所に戻ってきて[245]，母親は男として生んだ子は誰であれ父親に返すが，誰であれ女に生まれた子であれば戦いの武器に熟達するよう育てる。あるいは一部でそう信じられているように，彼女たちは男の子が生まれた場合，継母のごとき憎しみによってその哀れな子供の命を奪っていた。どこであれ強く望まれるものである［男児の］出産は，これほどまでに彼女たちにとっては嫌悪すべきものであった[246]。［M57］この残虐さこそが，人々の間に広まる，彼女たちに対する大いなる恐怖を増幅させていた。というのも，思うに，息子に寛大であることすら忌み嫌われるところで，囚われの者たちにどんな希望があるというのか。

57．言われるところでは，彼女らとヘラクレスが戦い，勇敢さというよりはほとんど計略を用いてメラニス〔メラニッペ〕[247]を屈服させた。さらにテセウスはヒッポリュテ[248]を略奪し，彼女と

（Iammus）」と修正するが，いかなる写本にも基づいていない。ここでは，クラス I の大半とクラス III が伝え，Mommsen 版が採用する Lammus と読む。

242　「プロパニスス（Propanisus）」：この読みは主としてクラス III が伝える。クラス I は propanissimus，クラス II は propanismus の読みを伝える。

243　ソリヌス『驚異譚集成』38.12–13. この一文は，Mommsen 版では “aliaeque conplurimae gentes huic iugo dedere vocabulo”（「他の様々な民族もこの尾根に名前を与えている」）となる。

244　直訳すれば「われわれがそこから逸れたところのアマゾネス人へと戻ろう（“Et quia de eius continuatione pauca libauimus, ad Amazonas unde diuertimus redeamus”）」。

245　Mommsen 版では，“ita ut futuri temporis eadem die revertentibus in id ipsum”（「次の時期の同じ日に同じ場所に戻ってきて」）。

246　アマゾネス人による子供の扱いについては，ストラボン『地理誌』11.5.1; ユスティヌス『ピリッポス史』2.4 を参照。

247　「ほとんど … メラニスを（Melanis pene）」：写本群はほぼ一致してこの形を伝えており，Mommsen 版とともにわれわれもこの表記を採用する。Mommsen はこれが「メラニッペ（Melanippen）」の綴り間違いであると疑い，Grillone 版は本文に Melanippen を採用している。

248　Grillone 版の Hippolyte という読みは写本に現れず，Mommsen 版は H, P, X 写本の読みである hippolite を採用している。他の神話上の人物らと同様に，ここでは慣用に従って表記する。

の間にヒッポリュトゥスをもうけた[249]。また後に，このアマゾネス人はペンテシレアという名の女王を戴いたが，彼女についてはトロイア戦争のときの素晴らしい記録が残っている。実際，彼女たちはアレクサンドロス大王の時までその勢力を保ったと言われる[250]。

IX．58.「ゴート人の男たちについての話をするのに，なぜこれほど女たちについて長々と続けるのか」と言うなかれ。男たちの素晴らしく尊敬すべき勇敢さについても聞くが良い。歴史家にして極めて熱心な過去の探求者たるディオは，『ゲティカ』という表題を自身の著作に付したが（すでに上記のところで，オロシウス・パウルス[251]が述べたように，ゲタエ人がゴート人であることは示した）[252], このディオははるか後代における彼らの王としてテレフォスなる人物に触れている[253]。この名前がゴート人の言葉からかけ離れたものであると言う者はいないであろう。関心を持つ者ならば, 諸民族（ゲンテス）が慣習によって多様な名前を採り入れることを知らぬはずはない[254]。ローマ人がマケドニア人の，ギリシア人がローマ人の，サルマタエ人がゲルマン人の，そしてしばしばゴート人がフン人の［名を］借用するのだから。
59．さてそのテレフォスは，ヘラクレスの息子でアウゲから生まれ，プリアモスの姉妹と婚姻によって一緒になったのだが，その長身と，なにより力強さによって恐れられていた。彼は自らの力で父の勇敢さに比肩し, また外見が似ていることからもヘラクレスの天分を想起させていた（祖

249　Grillone 版の Hippolytus という読みは写本に現れず，Mommsen 版は H, P 写本の読みである hypolitus を採用している。ここでは慣用に従う。アポロドロス『ギリシア神話』摘要 1.16 によれば，彼の時代においてすでにテセウスの妻が誰であったかは定かではなく，アンティオペ，メラニッペ，ヒッポリュテの三説があったとされる。

250　ユスティヌス『ピリッポス史』2.4; オロシウス『異教徒を反駁する歴史』1.15.

251　オロシウスはときおり「パウルス・オロシウス」と表記されるが，「パウルス」の名はこの箇所が初出とされる。しかしながら「パウルス」の由来は，ここでの奇妙な表記（“Orosio Paulo”）が示唆するように，もともと “Orosius Presbyter” を意図して書かれていた “Orosius P” が，間違って “Orosius P(aulus)” と展開されたことによるものであり（間違えたのはヨルダネスか，それともカッシオドルスか），したがって「パウルス」はオロシウスの個人名ではないとするのが支配的な見解である（オロシウスの英語訳 Fear 2010: 1 を参照）。

252　オロシウス『異教徒を反駁する歴史』1.16.2 はたしかにこのことを述べているが，『ゲティカ』では冒頭および 40–41 で曖昧に触れられるに過ぎず，それらが「上記のところで（superiori loco）」という表現でヨルダネスが意図している箇所なのか不明瞭である。あるいはこの一文は，カッシオドルスを利用した際の編集の名残かもしれない。ゴート人とゲタエ人の問題については，『ゲティカ』41 ならびに訳註 188 参照。

253　ここで典拠とされるディオは，ディオン・クリュソストモスとされる。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 72–74）および『ゲティカ』40, 65 を参照。

254　この一文の冒頭 “nemo, qui animaduertat, nesciat...” は Grillone らによる修正であり, 写本群（と Mommsen 版）は “nemo qui nesciat animaduertat”（「［以下のことを］知らぬものはいない」）。

先たちは彼の王国をモエシアと呼んでいた[255]。その属州[256]は東方にドナウ川の河口を，南方にマケドニア，西方にヒストリア[257]，そして北方にドナウ川を［境界として］有する）[258]。［M 60］それゆえ前述の王はダナオイ人[259]と戦争を起こした。60．その戦いのさなか，彼はギリシアの将軍テルサンドロスを殺害したが，アイアスと敵対することとなって侵攻し，オデュッセウスを追跡していたときに，ブドウの蔓に引っかかった馬から自身が落ちて，アキレスの槍によって太腿に傷を負い，長い間治癒できなかった。それでも彼は，傷を負いながらもギリシア人を彼の領土から追い出した。そしてテレフォスが死ぬと，息子のエウリュピュロス[260]が王位を継いだが，彼はフリュギア人の王プリアモスの姉妹が生んだ子だった。カッサンドラへの愛ゆえに，彼はトロイア戦争に参加して親族と義父を助けに行こうと望んだが，到着してまもなく殺されてしまった。

X．61．次いでペルシア人の王キュロス[261]が，ポンペイウス・トログスが証言するところでは，ほぼ630年間という長大な隔たりの後で，ゲタエ人の女王トミュリス[262]に対して，自身を破滅させることとなる戦争を仕掛けた[263]。アシアでの勝利で勢いに乗った彼は，先述したようにトミュリスを女王とするゲタエ人を服従させるべく邁進した。彼女はアラクセス川でキュロスの進出を食い止めることができたのに，渡河を許し，地の利を活かして追い払うよりも武力でもって彼を倒すことを選んだ。そしてそれは現実のこととなった。62．キュロスがやってきたとき，はじめのうちは運命がパルティア人に微笑み，トミュリスの息子と軍の大半を殲滅したほどであった。しかし争いが再開されると，ゲタエ人は女王と共にパルティア人を打ち破って屈服させ，素晴ら

255　神話ではテレフォスは小アジアのミュシアの王であるが，写本上の表記は moesiam, moesia, maesiam のいずれかである。ヨルダネス（ないし彼の情報源）が Mysia と Moesia を混同していた可能性については，訳註177参照。

256　『ゲティカ』48の訳註219を参照。

257　ヒストリア（Histria）は，アドリア海に面するイストリア半島を指す。

258　オロシウス『異教徒を反駁する歴史』1.2.55が典拠と思われるが，ここではオロシウスのテクストに見られる「南東にトラキアが，［…］南西にダルマティアが，［…］北西にパンノニアが」という表現が省略されている。

259　ホメロス『イリアス』などにおけるギリシア人の別称（*DNP*, s.v. “Danaoi”）。

260　Grillone 版の Eurypylus という読みは写本に現れず，Mommsen 版は H, P 写本の読みである Euryphylus を採用している。ここでは慣用に従う。

261　キュロス2世（在位紀元前559–530年）のこと（*DNP*, s.v. “Kyros [2] K. (II.?)”; *EIr*, s.v. “Cyrus iii. Cyrus II the Great”）。なおペルシアの王たちについても，慣用表現を採用する。

262　トミュリスは，紀元前530年頃のマッサゲタイの女王で，ヘロドトス『歴史』1.205–214が初出である（*DNP*, s.v. “Tomyris”）。

263　ポンペイウス・トログスを要約したユスティヌス『ピリッポス史』1.8を参照。630年という数字は，ヨルダネス自身による計算と推測されている。

しい戦利品を彼らから得た[264]（そこでゴート族（ゲンス）は，初めて絹の天幕を見たのである）。そして，勝利によって高められ敵から大量の戦利品を得た女王トミュリスは，「大スキュティア」の名前に準えて今では「小スキュティア」と呼ばれるモエシア側へと渡り，モエシアのポントゥス沿岸に彼女の名前に由来するトミという町を建設した[265]。

63．その後，ペルシア人の王にしてヒュスタスペス[266]の息子であるダレイオス[267]が，ゴート人の王アンテュルス[268]の娘を婚姻のために要求し，彼の意思に彼らが従わぬことがないよう請うと同時に脅した[269]。彼との繋がりを拒絶したゴート人は，彼の使節を落胆させた。拒絶され，怒りによって真っ赤になった彼は，70 万もの兵からなる軍を彼らに差し向け，自らの恥を公の悪意でもって拭おうとした[270]。カルケドンからビザンティウム[271]までのほとんどを，船々を板によって橋のごとく平らに繋げて，彼はトラキアとモエシアへと出発した[272]。同じようにして彼はドナウ川にも橋を作ったが，2 ヶ月間の労苦の末，疲弊して 8,000 の兵をタパエで失った[273]。ドナウ川の橋が彼の敵対者らによって奪われることを恐れた彼は，急いで逃げトラキアへと退却した。モエシアの地に自分が留まることが，一時たりとも安全であるとは考えなかったのである[274]。64．彼の死

264　ユスティヌス『ピリッポス史』1.8; オロシウス『異教徒を反駁する歴史』2.7 を参照（戦争の経過は多少異なる）。

265　トミの町（現在のルーマニア，コンスタンツァあたり）は，一般にミレトスの人々によって紀元前 7 世紀に建設されたとされ（*RE*, Suppl. 9: 1397–1428），その起源をアマゾネス人に帰すのはヨルダネスのみである。

266　ヒュスタスペスはペルシア王家の一員として，対マッサゲタイ戦役などで活動したことが知られる（*EIr*, s.v. “Goštāsp”）。

267　ダレイオス 1 世（在位紀元前 522–486 年）のこと（*DNP*, s.v. “Dareios [1] D. I.”; *EIr*, s.v. “Darius iii. Darius I the Great”）。

268　アンテュルスは，オロシウス『異教徒を反駁する歴史』2.8.4 ではスキュティア人の王として現れ，そのオロシウスの典拠であるユスティヌス『ピリッポス史』2.5 では「ヤンテュロス」の名で登場する。

269　文の後半は，「（そのように）請うと同時に，彼の意思に彼らが従わぬことがないよう脅した」とも訳せる（rogans を前にかけるか後ろにかけるかの違い）。

270　ダレイオス 1 世によるこの遠征は紀元前 514 年頃のこととされる。

271　ビュザンティウム（のちのコンスタンティノープル）は，ここでは Bizantium の綴りで表現されている（Grillone 版の綴りである Byzantium は写本にないため，Mommsen 版を採用した）。

272　Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 250–251）は「モエシア」のところを「ミュシア」と訳しているが，Mommsen 版，Grillone 版ともにラテン語は Moesia である。典拠とされるオロシウス『異教徒を反駁する歴史』2.8.4–7 では，この語を含むこの一文は出てこない。

273　「8,000（viii milia）」の数字は，Mommsen 版に従った。Grillone は，写本群に基づかずオロシウス『異教徒を反駁する歴史』2.8.6 の記述に拠って「8 万（lxxx milia）」と訂正している。「タパエ（Tapae）」はダキアへと通ずる道沿いの町で，『ゲティカ』74 にも登場する（*DNP*, s.v. “Tapae”）。

274　オロシウス『異教徒を反駁する歴史』2.8.4–7; cf. ユスティヌス『ピリッポス史』2.5. なおこの最後の一文における「モエシア（Moesiae）」はクラス II の B 写本のみの読みであり，他の写本（と Mommsen 版）は（ク

後，その息子クセルクセス[275]が再び父の屈辱を晴らそうと決めて，70万の自軍と30万の補助軍，1,200隻の軍船[276]と3,000の輸送船でもってゴート人に対する戦争のため進軍した。だが彼は戦いを仕掛けるほどの強さもなく[277]，彼ら〔ゴート人〕の勇猛さと堅固さに圧倒された。そして来たときと同じように，まったく戦火を交えることなく彼は軍とともに撤退した[278]。

65. ついでアレクサンドロス大王の父フィリッポス[279]がゴート人と友誼を結び，王ゴティラ[280]の娘であるメドパ[281]を妻として迎え，その結びつきを強めることでマケドニア人による支配を確固たるものにしようとした。歴史家ディオが述べるように[282]，この頃にフィリッポスは財貨が欠乏したため，モエシアの町であるオデュッシタナ[283]を，軍隊を編成して破壊するよう取り計らった。そこは当時トミの近隣であったためゴート人の支配下にあった。すると，「敬虔なる者たち[284]」と

ラスIIIのX写本［Maesiae］を除き）すべて「ミュシア」を示す単語であることに注意。

275　クセルクセス1世（在位紀元前486–465年）のこと：*DNP*, s.v. “Xerxes [1] X. I.”.

276　文字通りには「衝角（付きの）船（“rostratis nauibus”）」。

277　Mommsen版および写本群とともに，“nec temptare in conflictu praevaluit” と読む。Grillone版は “Nec temptata re in conflictu praeualuit”（「事を起こしても彼は戦いで優位にたてず」）と修正して読むが，次の一文と整合しない（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 251）。

278　オロシウス『異教徒を反駁する歴史』2.9.2; cf. ユスティヌス『ピリッポス史』2.10.

279　マケドニア王国のフィリッポス2世（在位紀元前359–336年）：*DNP*, s.v. “Philippos [4] Ph. II.”.

280　「ゴティラ（Gothila）」：クラスIIがこの綴りを伝え，Grillone版がこれを採用する一方で，クラスIとIIIは「グディラ Gudila」と読む。この人物の詳細は不明であるが，アテナイオス『食卓の賢人たち』13.557Dがサテュロス『フィリッポス伝』を引いて伝えるところでは，トラキアの王コテラス（Κοθήλας）の娘メダ（Μήδα）がフィリッポスの妻となっており，これに対応すると思われる。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 251）は，この人物がオドリュサイ王国の王だとするが，これはオドリュサイの王コテュス1世と混同した間違いであると思われる（cf. *DNP*, s.v. “Kotys [I 1]”）。

281　「メドパ（Medopa）」：クラスIIIおよびクラスIのH写本ではmedorumと読む。前註の「メダ」に対応するほか，6世紀のステファノス『エトニカ』I: 422が伝える「ゲティス〔ゲタエ人の女〕と呼ばれる，アミュンタスの娘にしてフィリッポスの妻」も同一の人物かもしれない。

282　ここで述べられる「歴史家ディオ」は，ディオン・クリュソストモスと考えられている（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 72–74）。『ゲティカ』40, 58も参照。

283　Grillone版はポンポニウス・メラ『地誌』2.22を参照してOdessitanaと書いているが，写本に根拠を持たない。ここではMommsen版のOdyssitanaを採用した。現在のヴァルナに相当する。

284　「敬虔なる者たち（Pii）」：写本群は一致してこの読みを伝えるが，Mommsenは，ストラボン『地理誌』16.2.39においてゲタエ人が「神」と呼ぶ祭司が言及されることを根拠に「神々（Dii）」への修正を提案するJacob Grimmの説を紹介している。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 251–252 n. 250）も，トゥキュディデス『戦史』2.96.2が述べる「神々」なるトラキア人の一団との関連を指摘しつつ，Diiが本来のテクストであったとの解釈をとる。彼（女）らによれば，DiiからPiiへの修正は写字生の誰かに帰せられるのだが，それはすぐ下の行に現れる「父祖の神々」に向かって「神々」が嘆願するのが奇妙に思えたからであろうとする。しかしながらVan Nuffelen

呼ばれていた，かのゴート人の祭司たちが，突然開かれた門から，キタラをもって純白の身なりで対面すべく進み出て，父祖の神々に対して，自分たちに微笑みマケドニア人を蹴散すようにと嘆願の声を奏でた。マケドニア人たちは彼らが自信満々に向かってくるのを見て驚愕し，そして，もしこう述べるのが正しいのであれば，武装した者たちが武装していない者たちによって恐れさせられることとなった。彼らが戦いに備えて構築した戦列はたちまち崩れ，彼らはその都市の破壊を止めるのみならず，戦場の掟に沿って郊外で獲得したものを返還し，和約を結んで故地へと帰った。

66. 長い年月ののち，その策略を思い起こした傑出したゴート人の指導者シタルクス[285]は，15万のアテナイ人兵を集めて戦争を仕掛け[286]，マケドニア王ペルディッカスと敵対した。アレクサンドロスがバビロニア付近で廷臣の計略によって毒を飲んだ際，相続分として，アテナイの後継元首として彼を残していたのである。彼との大規模な戦が始まると，ゴート人は優位であることを示し，そしてその結果，彼ら〔マケドニア人〕がモエシアでかつて犯した悪行の見返りとして，ギリシアを蹂躙しマケドニア全土を荒廃させた[287]。

［つづく］

＊付記
本稿は，JSPS 科研費（JP19K01077, JP21K00922, JP19K13389）により得られた研究成果の一部である。匿名の査読者２名からは有益なコメントを頂いた。記して感謝申し上げる。

らの説明は，ヨルダネス自身が Pii と書いた可能性の否定にはなっておらず，慎重な検討が必要である。

285　オドリュサイの王シタルケスのこと（*DNP*, s.v. “Sitalkes [1]”）。

286　ここでは Grillone 版と Mommsen 版で句点の位置が異なる。Grillone 版に従えば，「15 万の兵を集めてアテナイ人に戦争を仕掛け（“CL uirorum milibus congregatis, Atheniensibus intulit bellum”）」となるが，トゥキュディデス『戦史』2.95 によれば当時シタルケスはアテナイと同盟関係にあり，共にマケドニアとカルキディケを攻撃する算段であった。Grillone 版はこの句点位置の変更を註記しておらず，変更の理由も説明していないため，ここでは Mommsen 版の読みを採用した。

287　本節は，年代順に記述するのであればもっと前に置かれるべきである。ここで述べられるマケドニア王ペルディッカス（2 世，在位紀元前 450 頃 –413 年：*DNP*, s.v. “Perdikkas [2] P. II.”）とシタルケスの争いは，紀元前 5 世紀のこととしてトゥキュディデス『戦史』（2.95–101）が伝えている。ヨルダネスが間違えたのか（故意にであろうか。Cf. Grillone 2017: 321–322 n. 304），あるいは彼が直接の典拠とした「歴史家」ディオに拠るものなのかは不明である。あるいはトゥキュディデスが述べるペルディッカスの父アレクサンドロス（1 世）を，アレクサンドロス 3 世（大王）と勘違いした可能性もある。